

# 薄紅梅

泉鏡花

青空文庫



翹町九段——中坂は、武蔵鏡、江戸砂子、惣鹿子等によれば、いや、そんな

事はどうでもいい。このあたりこそ、明治時代文芸発程の名地である。かつて文壇の梁山泊と称えられた硯友社、その星座の各員が陣を構え、塞頭高らかに、我楽多文庫の旗を翻した、編輯所があつて、心織筆耕の花を咲かせ、綾なす霞を爨燹かせた。

若手の作者よ、小説家よ!……天晴れ、と一つ煽いでやろうと、扇子を片手に、当時文界の老將軍——佐久良藩の碩儒で、むかし江戸のお留守居と聞けば、武辺、文道、両達の依田学海翁が、一夏土用の日盛の事……生平の揚羽蝶の漆紋に、袴着用、大刀がわり

の杖を片手に、芝居の意休を一ゆがきして洒然と灰汁を抜いたような、白い髯を、爽に抜きながら、これ、はじめての見参。……

「頼む。」

があいにく玄関も何もない。扇を腰に、がたがたと格子を開けると、汚い二階家の、上も下も、がらんとして、ジイと、ただ、招魂社辺の蝉の声が遠く沁込む、明放しの三間ば

かり。人影も見えないのは、演義三国誌常套手段おきまりの、城門に敵を詭あざむく計略。そこは先生、武辺者だから、身構えしつつ、土間取附とつつきの急な階はしご子段だんを屹きつと仰いで、大音に、

「頼もう！」

人の氣勢けはいもない。

「頼もう。」

途端に奇なる声あり。

「ダカレケダカ、ダカレケダカ。」

その音おん、まことに不気味にして、化猫が、抱かれない、抱かれない、と天井裏で鳴くように聞える。坂下の酒屋の小僧なら、そのまま腰を抜かす処を、学海先生、杖の手に氣を入れて、再び大音に、

「頼む。」

「ダカレケダカ、と云つてるじゃあないか。へん、野暮め。」

「頼もう。」

「それつも、一つ、タカノコモコ、と願いたいよ。……何しろ、米八よねはち、仇吉あだきちの声じゃないな。彼女等きやつらには梅柳ばいりゅうというのが春しゅんだ。夏やせをする質たちだから、今頃は出あるかねえ。」

「頼むと申す……」

「何ものだ。」

と、いきなり段の口へ、青天の雷神かみなりが倒めつたように這身はいみで大きな頭を出したのは、虎の皮でない、木綿越中の素すつばだか裸——ちよつと今時の夫人、令嬢がたのために註しよう

——唄に……

……どうすりや添われる縁じややら、じれつたいね……

というのがあつた。——恋は思案のほか——という折紙附の格言がある。よつてもつて、自から称した、すなわちこれ、自劣じれつてい亭思案外史である。大学中途の秀才にして、のぼせを下げる三分刈の巨頭は、入道の名に謳うたわれ、かつは、硯友社の彦左衛門、と自から任じ、人も許して、夜討朝駆に寸分の油断のない、血氣盛げきざかりの早具足なのが、昼寝時の不意討に、蠅はえたたき叩たたもとりあえず、ひたと向合つた下土間の白い髻げを、あべこべに、炎天九十度の物干から、僧正坊が覗のぞいたか、と驚いた、という話がある。

おなじ人が、金三円ばかりなり、我楽多文庫売上の暮近い集金の天保銭……世に当百と  
きこえた、小判形が集まったのを、引攫ひつさらつて、目ざす吉原、全盛の北の廓くるわへ討入るのに、  
鍔しころの数ではないけれども、十枚で八錢だから、員数およそ四百枚、袂たもと、懐ふところ中、こいつは  
持てない。辻つじぐるま俵のの蹴込けこみへ、ドンと積んで、山塞さんさいの中坂を乗下ろし、三崎町ちようちょうの原を切  
つて、水道橋から壱岐殿坂いきどのさかへ、ありやありやと、俵夫くるまやと矢声を合わせ、切通きりとおしあたり  
になると、社中随一のハイカラで、鼻めがねを掛けている、中山高、洋服の小説家に、天  
保銭の翼はねが生えた、縞束さしたばを両手に、二筋振つて、きおいで左右へ捌さばいた形は、空を飛ん  
で翔かけるがごとし。不忍池しのばずのいけを左に、三枚橋、山下、入谷いりやを一のしに、土手へ飛んだ。  
……当時の事の趣も、ほうけた鼓草たんぼぼのように、散つて、残っている。

近頃の新聞の三面、連日に、偷盗ちゆうとう、邪淫じやいん、殺傷の記事を読む方々に、こんな事は、  
話どころか、夢だとも思われまい。時世は移った。……

ところで、天保銭吉原の飛行ひぎようより、時代はずっと新しい。——ここへ点出しようとい  
うのは、件くだんの中坂下から、飯田町通どおりを、三崎町の原へ大斜めに行く場所である。が、あの  
辺は家々の庭背戸が相応に広く、板塀、裏木戸、生垣の幾曲り、で、根岸の里の雪の卵うの  
花、水の紫陽花あじさいの風情はないが、木瓜ぼけ、山吹の覗かれる窪地の屋敷町で、そのどこからも、

駿河台の濃い樹立の下に、和仏英女学校というのの壁の色が、風の吹く日も、暖かそうに霞んで見えて、裏表、露地の処々から、三崎座の女芝居の景気幟が、茜、浅黄、青く、白く、また曇つたり、濁つたり、その日の天気、時々空の色に、ひらひらと風次第に靡くが見えだし、場処によると——あすがもう水道橋——三崎稲荷の朱の鳥居が、物干場の草原だの、浅蜷、蜷の貝殻の棄てたも交る、空地を通して、その名の岬に立ったように、土手の松に並んで見通された。

……と見て通ると、すぐもう広い原で、屋敷町の屋敷を離れた、家並になる。まだ、ほんの新開地で。

そこいらに、小川という写真屋の西洋館が一つ目立った。隣地の町角に、平屋建の小料理屋の、夏は氷店になりそうなものがあるのと、通りを隔てた一方の角の二階屋に、お泊宿の軒行燈が見える。

お泊宿から、水道橋の方へ軒続きの長屋の中に、小さな貸本屋の店があつて……お伽堂……びら同然の粗な額が掛けてある。

お伽堂——少々気になる。なぜというに、仕入ものの、おとしの浅い箱火鉢の前に、二十六七の、色白で、ぽつとりした……生際はちつと薄いが、桃色の手柄の丸髻で、何だ

か、はればつたい、まぶた瞼をほんのりと、ほかほかする小春日の日当りに表を張って、客欲し  
そうに坐っているから。……

羽織も、着ものも、おさすりらしいが、やわらか柔すぐめで、まえだれ前垂の膝も、しんなりとやわらか軟い。  
……その癖半襟を、あじ頤でお圧すばかり包ましく、胸の紐の結びめの深い陰から、色めく浅黄  
の背負上しよいあげが流れたようにこぼれている。解けば濡れますが、はい、身はかたくし緊めて包  
んで置きます、といった風容。……これを少々気にしたが悪いだろうか……お伽堂の店番  
を。

## 三

何、別に仔細しさいはない。客引に使った中年増でもなければ、手軽な妾めかけが世間体を繕なまつてい  
るでもない。お伽堂というのは、この女房の名の、おときをちよつと訛なまつたので。――  
勿論亭主の好みである。

つい近頃、北陸の城下町から稼いぎに出て来た。商売往来の中でも、横町へそれた貸本屋  
だが、亭主が、いや、役人上りだから主人といおう、県庁に勤めた頃、一切獵具を用いず、

むずと羽搔はがをしめて、年紀は娘としにしている、甘温、脆膏ぜいこう、胸白むなしろのこの鴨かもを貪食した果報ものである、と聞く。が、いささか果報焼けの気味で内臓を損じた。勤労に堪えない。静養かたがた女で間に合う家業でつないで、そのうち一株ありつく算段で、お伽堂の額を掛けたのだそうである。

開業当初のつけに、僥倖ぎょうこうにも、素晴らしい利得もうけがあつた。

「こちらじゃ貸すばかりで、買わないですか。」

学生が一人、のっそり立ち、洋書を五六冊引抱ひんだいて突立つったつたものである。

「は、おいで遊ばしませ。」

と、丁寧ていねいに、三指もどきのお辞儀をして、

「あの、もしえ。」

と初々ういういしいほど細い声を掛けると、茶の間の悪く暗い戸棚の前で、その何かしら――内臓病者補壯の食はまだ考えない、むぐむぐ頬張つていた士族元はげの胡麻塩ごましおで、ぶくりと黄色い大面おおづらのちよんびり眉が、女房の古らしい、汚れた半帕ハンケチを首に巻いたのが、鼠色の兵子帯へこおびで、ヌーと出ると、捻ひねつても旋ねじつても、眦めじりと一所に垂れ下る髯とつききの尖端を、グイと揉もみ、

「おいでい。」

と太い声で、右の洋冊ようしよを横縦に。その鉄壺眼かなつぽまなこで……無論読めない。貫目を引きつつ、膝のめりやすを溢出はみださせて、

「まるで、こりや値になりませんぞ。」

原著者は驚いたろう。

「しかし買うとして、いくらですか。」

——途方もない値をつけた。つけられた方は、呆れるより、いきなり撲なぐるべき蹴倒し方だったが、傍かたわらに、ほんのりしている丸髻まげゆえか、主人の錆びた鉞びようのような眼色めつきに恐怖おそれをなしたか、気の毒な学生は、端銭はしたを衣兜かくしに捻込ねじこんだ。——三日目に、仕入の約二十倍に売れたという

味をしめて、古本を買込むので、床板を張出して、貸本のほかに、その商あきなをはじめたのはいいとして、手馴てなれぬ事の悲しさは、花客とくのほかに、搔かっぱら払い抜取りの外道げどうがあるのに心づかない。毎日のように攫さらわれる。一度の、どか利得もうけが大穴になつて、丸髻まげだけでは店が危い。つい台所用に女房が立ったあとへは、鉞びようの目が出て髻まげを揉むと、「高利貸あが居るぜ。」とか云つて、貸本の素見ひやかしまでが遠ざかる。当り触り、世渡よわたりは煩むずかしい。が近頃

では、女房も見張りに馴れたし、亭主も段々古本市だの場末の同業を狙って、掘出しに精々出あるく。

——いい天気の、この日も、午飯ひるすぎると、日向ひなたに古足袋ほこりの埃ほこりを立てて店を出たが、ひよこりと軒下へ、あと戻り。

「忘れものですか。」

「うふふ、丸鬚まげども、よう出来たたい。」

「いやらし。」

と顔をそらしながら、若い女房の、犠牲いけにえらしいあわれな媚こびで、わざと濡色ぬるの鬚たばを見せる。

「うふふ。」と烏打帽こうべの頭すくを竦すくめて、少し猫背ねこせで、水道橋の方へ出向いたあとで。……

#### 四

遅い午餉ひるだったから、もう二時下り。亭主の出たあと、女房は膳ぜんの上で温茶ぬるちやを含んで、干ものの残りに皿をかぶせ、余った煮豆かたに蓋ふたをして、あと片附は晩飯ばんと一所。で、拭布ふきんを

掛けたなり台所へ突出すと、押入続きに腰窓が低い、上の棚に立掛けた小さな姿見で、顔を映して、襟を、もう一息搔合わせ、ちよつと縮れて癖はあるが、髪結も世辞ばかりでない、似合つた丸髻で、さて店へ出た段取だつたが……

——遠くの橋を牛車でも通るように、かたなかたんと、三崎座の昼芝居の、つけを打つのが合間に聞え、囃の音がシャラシャラと路地裏の大溝へ響く。……

裏長屋のかみさんが、三河島の菜漬を目筈で買いに出るにはまだ早い。そういえば裁縫の師匠の内の小女が、たつたいま一軒隣の芋屋から前垂で盆を包んで、裏へ入つたきり、日和のおもてに人通りがほとんどない。

真向うは空地だし、町中は原のなごりをそのまま、窪地のあちこちには、草生がむらむらと、尾花は見えぬが、猫じやらしが、小糠虫を、穂でじやれて、逃水ならぬ日脚の流が暖く淀んでゐる。

例の写真館と隣合う、向う斜の小料理屋の小座敷の庭が、破れた生垣を透いて、うら枯れた朝顔の鉢が五つ六つ、中には転つたのもあつて、葉がもう黒く、鶏頭ばかり根の土にまで日当りの色を染めた空を、スツスツと赤蜻蛉が飛んでゐる。軒前に、不精たらしい釣葱がまだ掛つて、露も玉も干乾びて、蛙の干物のようなのが、化けて歌でも詠み



が、じれったそうな女房は、上気した顔を向け直して、あれ性の、少し乾いた唇でなぶるうち——どうせ亭主にうしろ向きに、今も鬘を賞められた時に出した舌だ——すぼめ口に吸って、濡々と呂した。

——こういう時は、南京豆ほどの魔が跳るものと見える。——

パツと消えるようであった、日の光に濃く白かった写真館の二階の硝子窓を開けて、青黒い顔の長い男が、中折帽を被つたまま、戸外へ口をあけて、ペろりと唇を舐めたのとほとんど同時であつたから、窓と、店とで思わず舌の合った形になる。

女房は真うつむけに突伏した、と思うと、ついと立って、茶の間へ遁げた。着崩れがしたと見え、褌が捻れて足くびが白く出た。

## 五

「ごめんなさい。」

返事を、引込めた舌の尖で丸めて、黙りのまま、若い女房が、すぐ店へ出ると……文金の高島田、銀の平打、高彫の菊簪。十九ばかりの品のあるお嬢さんが、しつとり

寂しいほど、着瘦せのした、縞お召に、ゆうぜんの襲着して、藍地糸錦の丸帯。鶺鴒の嘴がちよつと触つても微な董色の痣になりそうな白玉椿の清らかに優しい片頬を、水紅色の絹半帕でおさえたが、且は桔梗紫に雁金を銀で刺繡した半襟で、妙齡の髪の艶に月の影の冴えを見せ、うつむき加減の頤の雪。雪のすぐあとへは惜しいほど、黒塗の吾妻下駄で、軒かげに斜に立った。

実は、コトコトとその駒下駄の音を立てて店前へ近づくのには、細り捌いた棲から、山茶花の模様のちらちらと咲くのが、早く茶の間口から若い女房の目には映つたのであつた。

作者が——謂いたくないことだけれど、その……年暮の稼ぎに、ここに働いている時も、昼すぎ三時頃——、ちようど、小雨の晴れた薄霽に包まれて、向う邸の紅い山茶花が覗かれる、銀杏の葉の真黄色なのが、ひらひらと散つて来る、お嬢さんの肌についた、ゆうぜんさながらの風情も可懐しい、として、文金だの、平打だの、見惚れたように呆然として、現在の三崎町……あの辺町の様子を、まるで忘れていたのでは、相済むまい。

——場所によると、震災後の、まだ焼原同然で、この貸本屋の裏の溝が流れ込んだ筈の横川などは跡も見えない。古跡のつもりで、あらかじめ一度見て歩行いた。ひよろひ

よろもの作者ごときは、外套がいとうを着た蟻あまのようで、電車と自動車が大昆虫のごとく跳ちよう梁りよう奔ほん馳ちする。瓦礫がれき、烟塵えんじん、混濁ちまたの巷ちまたに面した、その中へ、小春の陽炎かげろうとともに、貸本屋の店頭みせさきへ、こうした娘姿を映出すのは——何とか区、何とか町、何とか様ア——と、大入の劇場から女の声の拡声器で、木戸口へ呼出すように楽には行ゆかない。なかなかもって、アテナ洋墨インキや、日用品の唐墨の、筆、ペンなどでは追つつきそうに思われぬ。彫るにも刻むにも、鋤すきと鋏くわだ。

さあ、持つて来い、鋤と鋏だ。

これだと、勢い汗膏あぶらの力作とかいう事にもなつて、外聞あひらが好いい。第一、時節がら一般の氣うけが好よかろう。

鋤と鋏だ、と瘦腕で、たちまち息ぜわしく、つい汗になる処から——山はもう雪だというのに、この第一回には、素裸の思案入道殿をさえ煩わした。

が、再び思うに、むやみと得物えものを振廻しては、馴なれない事なり、耕こううん耘んの武器で、文金に怪我をさせそうで危かしい。

またひるがえ翻ひるがえつて、お嬢さんの出のあたりは——何をいうのだ——かながきの筆で行ゆく。

「あの……此店こちらに……」

若い女房が顔を見ると、いま小刻みに、長襦袢ながじゆばんの色か、下着の褌はらはらと散りつつ急いで入った、息づかいが胸に動いて、頬の半帕ハンケチが少し揺れて、

「辻町、糸七の——『たそがれ』——というのがおありになって。」

と云った。

「おいで遊ばせ。」

と若い女房、おくれ馳ませの挨拶をゆつくりして、

「ございますの。……ですけれど、絡まとりました一冊本ではありません……あの、雑誌の中に交って出ていますのでして。」

「ええ、そうですよ。」

と水紅色の半帕がまたゆれる。

## 六

「ちよいちよい、お借り下さる方がございました、よく出ますから。……唯ただいま今見ますけれど。」

女房は片膝立ちに腰を浮かしながら能書のうがきをいう。

「……私も読みたい読みたいと存じながら、商売もので、つい慾張よくばりまして、ほほほ、お貸し申します方が先へ立ちますけれど。……何ですか、お女郎の心中ものだとか申しませぬのね。」

「そうですね。……『たそがれ』……というのが、その娼妓しょうぎ——遊女おいらんの名だつて事です。」

と、凜りんとした眦まなじりの目もきつぱりと言つた。簪の白菊も冷いばかり、清く澄んだ頬が白い。心中にも女郎にも驚いた容ようす子が見えぬ。もつともこのくらしいな事を気にしては、清元も、長唄も、文句だつて読めなからうし、早い話が芝居の軒も潜くぐれまい。が、うっかり小説の筋を洩もらして、面と向つたから、女房が却まがつて瞼まぶたを染めた。

棚から一冊抜取ると、坐り直して、売りものに花だらう、前垂に据えて、その縮緬ちりめんの縞しまでない、厚紙の表紙を撫なでた。

「どうぞ、お掛けなさいまして、まあ、どうぞ。」

はなからその気であつたらしい、お嬢さんは框かまちへ掛けるのを猶たぬら予らわなかつた。帯の錦は堆たかい、が、膝もすんなりと、着流しの肩が細い。

「ちようどいい処で、あの、ゆうべお客様から返ったばかりでございますの。それも書生さんや、職人衆からではございませんの。」

娘客の白い指の、指環ゆびわを捜すように目で追つて、

「中坂下からいらつしやいます、紫鹿子かのこのふつきりした、結綿ゆいわたのお娘ご、召した黄八丈など、それがようお似合いなさいます。それで、お袴はかまで、すぐお茶の水の学生さんなんぞでございますつて。」

「その方。……」

女房の膝の方へは手も出さず、お嬢さんは、しとやかに、

「その作者が、鼻屑ひいき？」

と莞爾にっこりした。

辻町糸七、よく聞けよ。

「は？……」

貸本屋の客には今までほとんど例のない、ものの言葉に、一度聞返して、合点のみこんで、

「別にそうと限ったわけではございません。何でもよくお読みになりますの。でも、その、ゆうべおいでなさいました時、「たそがれ。——いいのね。」とおっしゃいます。……晩

方でございましょう。変に暗くて気味が悪し、心細し、といえますうちにも、立込みまして、忙しくつて不可いけませんと申しましたら、お笑いなさいましたんでございます。長屋世帯はすぐそれですから、ほほほ。小説の題の事だったのでございますもの。大好きな女の名でいらつしやるんですつて。……田舎源氏、とかにもありますそうです。その時、京の五条とか三条あたりとかの暮方の、草の垣根に、雪白な花の、あわれに咲いたお話をききましたら、そのいやな入いりあ相が、ほんのりと、夕顔ほどに明るく、白くなりましてございましてね。」

女房は、ふと気がさしたか、町通りの向う角へ顔を向けた、短冊の舌は知らん顔で、鶏頭が笑っている。写真館の硝子窓は静しずかに白い日を吸つて。……

「……古寺の事もうかがいました。清元にございますつてね。……とところどころ、あの、ほんとうに身に沁しみますようですから、そのお娘ごにおねだりして、少しばかり、巻紙の端へ。——あ、そうそう、この本の中へ挟んで、——まあ、いい事をいたしました。大事に蔵しまつて置こうと存じながら、つい、うっかりして、まあ、勿体ないこと。」

と、軽く前髪へあてたのである。念のため『たそがれ』の作者に言おう。これは糸七を頂いたのでは決してない。……

「拝見な。」

「は、どうぞ。」

雑誌に被<sup>かぶ</sup>せた表紙の上へ、巻紙を添えて出す、かな交りの優しい書<sup>て</sup>で、

——折しも月は、むら雲に、影うす暗きをさいわいと、傍<sup>かたえ</sup>に忍びてやりすごし、

尚<sup>なお</sup>も人なき野中の細道、薄<sup>すすき</sup>茅原、押分け押分け、ここは何処<sup>いずこ</sup>と白妙<sup>しろたえ</sup>の、衣

打つらん砧<sup>きぬた</sup>の声、幽<sup>かすか</sup>にきこえて、雁<sup>かりがね</sup>音も、遠く雲井に鳴交わし、風すこし打吹

きたるに、月皎々<sup>こうこう</sup>と照りながら、むら雨さつと降りいづれば——

水茎の墨の色が、はらはらとお嬢さんの睫毛<sup>まつげ</sup>を走った。一露臉にうけたように、またたきして、

「すぐこのあとへ、しののめの鬼が出るんですのね、可恐<sup>こわ</sup>いんですこと……。」  
目白からは聞えまい。三崎座だろう、釣鐘がボーンと鳴る。

柳亭種彦のその文章を、そつと包むように巻戻しながら、指を添え、表紙を開くと、薄、

茅原、花野を照らす月ながら、さつと、むら雨に濡色の、二人が水の滴りそうな、光氏と、黄昏と、玉なす桔梗、黒髪の女郎花の、簾で抱合う、道行姿の極彩色。

「永洗ですね、この口絵の綺麗なこと。」

「ええ、絵も評判でございます。……中坂の、そのお娘ごもおっしゃいました。その小説の『たそがれ』は、現代のおいらなんだそうですけれど、作者だか、絵師さんだかの工夫ですか、意匠で、むかし風に詠えたんでしょう、とおっしゃって、それに、雑誌にはいろいろの作が出ておりますけれど、一番はなへのつておりますから、そうやって一冊本の口絵のように……だそうなのでございますッて。」

「結綿の、御容子のいい。」

口絵から目を放さず、

「その方、いろいろな事を、ようござんじ……羨しいこと。表紙を別につけて、こうなされば、単行——一冊ものもおなじようで、作者だって、どんなにか嬉しいでしょうよ。」

その方、という、この方、もいろいろな事を、ようご存じ。……で、その結綿のかな文字を、女房の手に返すと、これがために貸本屋へ立寄ったろう、借りて行く心づもりにも、口絵を伏せて、表紙をきちんと、じつと見た。

「あら。」

と瞳をうつくしく、

「ちよいと、辻町糸七作、『たそがれ』——お書きになったのは、これは、どちらの、あのこちらの御主人。」

「飛んだ、とんだ、いいえ、飛んでもない。」

と何を狼狽うろたえたか、女房はまた顔を赤くした。同時に、要するに、黄色く、むくんだ、亭主の鼻に、額ぬかが打着ぶかつたに相違ない。とにかく、中味が心中で、口絵の光氏とたそがれが目前めまきにある、ここへ亭主に出られては、しよげるより、悲かなむより、周章あわて狼狽うろたえずにいられまい。

「飛んでもない、あなた。」

と、息も忙せわしく、肩を揉もんで、

「宅などが、あなた、大それた。」

そうだろう、題字は颯爽さつそうとして、輝かしい。行と、かなと、珊瑚さんご灑そぎ、碧樹へきじゆ梳しつて、触るものも自おのずから気を附けよう。厚紙の白さにまだ汚点しみのない、筆の姿は、雪に珠じゆり琳りんの装よそであつた。

「あの、どうも、勿体なくて、つけつけ申しますのも、いかがですけれど、小石川台町にお住居すまいのございます、上杉様、とおっしゃいます。」

「ええ、映山先生。」

お嬢さんの珊瑚ちりばを鏤まさえめた蒔絵の櫛がうつむいた。

## 八

「どういたしまして。お嬢様、お心易さを頂くなぞとは、失礼で、おもいもよりませんのございますけれど。」

この紙表紙の筆について、お嬢さんが、貸本屋として、先生と知己ちかづきのいわれを聞いたことはいうまでもなからう。

「実は、あの、上杉先生の、多勢のお弟子さん方の。……あなたは、小説がおすきでいらつしやいますのを、お見受け申しましたから……ご存じかも知れませんが、そのお一人の、糸七さんでございますが。」

「ええ。」

「実は——私ども、うまれが同じ国でございましてね、御懇意を願っておりますものですから。」

「ちつとも私……まあ、そうですか。」

「その御縁で、ついこの間、糸七さんと、もう一人おつれになって、神保町辺へ用達においでなさいましたお帰りがけ、ご散歩かたがた、「どうだい、新店は立行くかい。」と最初から掛構いなくおつしやつて。——こちらは、それと聞きますと、お大名か、お殿様が御微行で、こんな破屋へ、と吃驚しましたのに、「何にも入らない。南画の巖のようなカステラや、べんべらものの羊羹なんか切んなさるなよ。」とお笑いなすつて、ちようど宅が。」

また眉を擡めたが、

「小工面に貸本へ表紙をかぶせておりましたのをごらんなさいまして、——「辻町のやつ、まだ単行が出来ないんだ。一冊纏ったもののように、楽屋中で祝つてやろう。筆を下さい。」——この硯箱を。」

「ちよいと、一度これを。」

と、お嬢さんは、硯箱を押させて、仲よしの押絵の羽子板のように胸へ当てていた『た

そがれ』を、きちんと据えた。

「……「ひどい墨だな、あやしい茶人だと、これを鳥の子に包むんだ。」とおつしやりながら、すらすらおしたためになつたんでございますが、あの、筆をおとり遊ばしながら、

「おんな おいらん婦は遊女だ、というじゃないか。……（おん 箸 入。）とかくようだ。中味は象牙ぞうげじ

やあるまい。馬の骨だろう。」……何ですか、さも、おかしそうに。——そうしますと、

糸七さんは、その傍そばで、小さくなつて。……」

お嬢さんの唇の綻ほころびた微笑ほほえみに、つい笑つて、

「何の事ですか、私などには解りませんの、お嬢様は。」

「存じません。」

「あれ御承知らしくていらしつて……お意地の悪い、ほほほ。」

「いいえ、知りません。中坂とかの、その結綿の方ならお解りでしょうね。……それより

か、『たそがれ』の作者の糸七——まあ、私、さつきから、……此店こちらとお知合とはちつと

も知らないもんだから、……悪かつたわねえ。糸七さん、ともいいませんでした。」

「いいえ、あなた、お客様は、誰方どなただつて、作者の名を、さん附にはなさいません。格別、

お好きな、中坂のその方だつて、糸七、と呼びすてでございますの。ええ、そうでござい

ますとも。この辺でござんなさいまし。三崎座の女役者を、御鼻負ごひいきは、皆呼びずてでござ  
います。」

言い得て女房、妙である。(おん簪入)の内容が馬の骨なら、言い得て特に妙である。  
が、当時梨園に擢ぬきん出た、名優久女八くめはちは別として、三崎座なみは情なさけない。場面を築地辺に  
とればまだしもであったと思う。けれども、三崎町が事実なのである。

「ほほほ、お呼びずての方が却ってお心易くつて、——ああ、お茶を一つ。」

「おかみさん、ちよいと、あの、それより冷水おひやを。」

「冷水?」

「あの、ざぶざぶ、冷水で、この半帕ハンケチを絞つて下さいませんか。御無心ですが。私ね、  
実は、その町の曲角で、飛んだ気味の悪い事がありましたね。」

## 九

「その旅宿やどやの角まで、飯田町の方から来ますとね、妾わたし、俵たくらだつたんですけれど、幌ほろが掛か  
つていましたのに、何ですか、なまぬるい、ぬめりと粘つた、濡れたものが、こつちの、

この耳の下から頬へ触ったんです。」

水紅色とぎいろの半帕ハンケチが、今度は花弁はなびらのしぼむ状さまに白い指のさきで揺れた。

「あれ、と違って、手を当てても何にもないんです。」

「あの、此店ここのちへおいでなさいました、今しがた……」

女房は頬をすぼめ、眉を寄せて、

「……まあ。」

「慌てて俵をとめましてね、上も下も見ましたけれど、別に何にもないんです。でも、可厭いやらしく、変へんに臭におうようで、気味が悪くって、気味が悪くって。無理にも、何でもお願いして思っても、旅宿やしやでしょう、料理屋ですもの、両方とも。……お店の看板が「かし本」と見えました時は、ほんとうに、地獄で……血の池で……蓮はすの花を見たようでしたわ。いきなり冷水おひやを、とも言いかねましたけれど、そのうちに、永洗えいせんの、名もいんですのね、『たそがれ』の島田に、むら雨のかかる処だの、上杉先生の、結構なお墨の色を見ましたら、実は、いくらかすすきりして来ましたんです。」

珊瑚碧樹の水茎すずしは、清すずしく、その汚濁おしよくを洗ったのである。

「いつまでも、さっきのままですと、私はほんとうに、おいらん的心中ではないんですけ

ど、死んでしまいたいほどでしたよ。」

大袈裟おおげさなのを笑いもしない女房は、その路連みちづれ、半町てまえ此方こなたぐらいには同感であつたらしい

「ええええお易い事。まあ、ごじようだんをおつしやつて、そんなお人がらな半帕を。：

…唯今、お手拭てぬぐい。」

茶の室まへ入るうしろから、

「綿屑わたくずで結構よ。」

手拭をさえ惜しんだのは、余程よっぽど身に沁しみみた不気味さに違いない。

女房は行きがけに、安手な京焼の赤湯香ひつさらを引攪ひきまぜうと、ごぼごぼと、仰向あおむくまで更あらためて嗽うがいをしたが、俵はつで来たのなどは見た事も無い、大事なお花客とくである。たしない買水かみづを惜気なく使った。——そうして半帕を畳みながら、行儀よく膝ひざに両の手を重ねて待ったお嬢さんお嬢さんに、顔へ当てるように、膝ひざを伸のしぎまに差出した。

「ほんとうに、あなた、蠅子ぶよのたかりましたほどのあともございませんから、御安心遊ばせ。絞しぼりかえて差上げましょう。——さようでございますか、フとしたお心持に、何か触ったのでございましょう。御気分は……」

「はい、お庇かげで。」

「それにつけて、と申すのでもございませぬけれど、そういえば、つい四五日前にも、同じ処で、おかしなことがあったんでございませぬ。ええ、本郷の大学へお通いなさいませぬ学生さんで、時々おいで下さいませぬ。その方ですが、あなた、今日のような好いいお日和ではありませぬ、何ですか、しぐれて、曇つて、寂しい暮方でございませぬの。」

「やあ、と云つて、その学生さんが、あの辻の方から。——油を惜しむなよ、店が暗いじゃないか。今つける処なのよ、とお心易立てに、そんな口を利きましてね、釣つり洋燈らんぶの傍そばに立つていますと、その時はお寄りなさらぬで、さつさと水道橋の方へ通越していらつしやいました。」

「三崎座が刎はねまして、両方へばらばら人通りがありました。それが途絶えましたちようどあとで、お一人で、さつさと幟のぼりのかけへ見えなくおなんなすつたんですが、燈ひがつきました、まだ蕊しんの加減もしません処へ、変だ、変だ、取殺される、幽霊だ、ばけものだ、と帽子なんか、仰向けに、あなた……」

「……燈をあかるくしてくれ、変だ。あ、痛い痛い、左の手を握って、何ですか——印を結んだとかいいますように、中指を一本押立てていらつしやるんです。……はじめは蜘蛛の巣かと思つたよ、とそういいなざるものですから、狂犬でなくて、お仕合せ、蜘蛛ぐらい、幽霊も化ものも、まあ、大袈裟なことを、とおかしいようでもございましたが、燈でよく、私も一所に、その中指を、じつと見ますと、女の髪の毛が巻きついてるんですよ。――」

「髪の毛ですえ、女の。」

お嬢さんは細い指を、白く揃えて、箱火鉢に寄せた。例の枯葱の怪しい短冊の舌は、この時朦朧として、滑稽が理に落ちて、寂しくなつたし、鶏頭の赤さもやや陰翳つたが、日はまだ冷くも寒くもない。娘の客は女房と親しさを増したのである。

「ええ、そうなのでございます。二人して、よく見ましたの、この火鉢の処で。」

お嬢さんは手を引込めた。枯野の霧の緋葉ほど、三崎街道の人の目をひいたろう。色ある半帕も、安んじて袖の振へ納つた。が、うっかりした。その頬を拭つた濡手拭は、火鉢の縁に掛つている。

女房はさまでは汚がらないで、そのままで、

「——学生さんの制服で駈戻かけもとつて来なさいましたのは水道橋の方からでございましょう。お稻荷様の鳥居が一つ、跨またを上げて飛んで来たように見えたのですけれど、変な事は——その旅宿やしやと向うの料理屋の中ほどの辻の処からだだったんだそうでございましてね——灰色の雲の空から、すーっと、細いものが舞下つて来て、顔から肩の処かかへ掛つたように思われたんでございまして。最初はな、蜘蛛の巣だろう……誰だつてそう思いますわ。

身体からだをもがいて払うほどの事じやなし——声を掛けて、内の前をお通りなさいました時は、もうお忘れなすつたほどだったそうなんです、芝居の前あたりで、それが咽喉のどへ触りました、むずむずと、ぐうと扱しじくように。」

「いやですなえ。」

「いやでございませうことね。——久女八が土蜘蛛をやっている、能がかりで評判なあの糸が、破風はふか、棟から抜出したんだらう。そんな事を、串じょうだん戯でなくでなくお思いなすつたそうです。」

芝居すき好きな方で、酔つぱらつた遊びがえりの真夜中に、あなた、やつぱり芝居すきの俵くるま夫とと話がはずむと、壹岐殿坂の真中まんなかあたりで、俵夫わかいしゆは吹消した提灯かんばんを、鼠に踏まえ

て、真しんちゆう鍬くわの煙管きせるを鉄扇てつせんで、ギツクリやりますし、その方は蝦蟇がまぐち口くちに、忍術にんじゆつの一卷いっけんですつて、蹴込けこみへ踞しゃがんで、頭あたままでかくした赤毛あかげつと布ふを段々だんだんに、仁木にき彈だん正じやうで糶せりあが上あった処ところを、交番かうばんの巡査おまわりさんに怒鳴いかられたつて人ひとなのでございますもの。

芝居しばいのちつと先方さきへいらつしやると、咽喉のどを、そのしめ加減かへんが違ちがつて来て、呼吸いきにさわるほどですから、払はらつてもとれないのを、無理むりにむしり離はなして、からだを二つ三つ廻まわりながら、搔かきはなすと、空そらへ消えたようだったそうでございますのに、また、キーと、まるで音ねでもしますように戻かへつて来て、今度は、その中指なな指へくるくると巻まきついたんですが、巻まきつくと一所いっしょに、きりきりきりきり引きしめて、きりきり、きりきり、その痛いたさといつては。……

縫針ぬい針のさきでさえ、身のうち響ひびきますわ。ただ事ことでない。解ひくにも、引切ひききるにも、目めに見えるか、見えないほどだし、そこらは暗くらし、何なによりか知しつた家とこの洋燈らんぷの灯あかりを——それでもつて、ええ。……

さあ、女の髪かみと分わりました、漆しやくのような、黒くろい、すなおな、柔なかな、細こ々ざした、その長ながうございましたこと。……お嬢ぢやう様さま。」

「いいえ、私わたしのは。」

ついでした様で、鬢へ触った。一うち、という眉が凜として、顔の色が一層白澄んだ。が、怪しい黒髪に見くらべたらしい女房の素振を憎んだのでなく、妙な話が身に沁みたまものらしい。

女房の言を切つて、「いいえ」と云つたのは、またそんな意味ではなかつたのである。

「あれ、変な人が、変な人が……」

変な人が、女房の正面へ、写真館の前へ出たのであつた。

## 十一

「こむ僧でしようか、あれ、役者が舞台の扮装のまままで写真を撮つて来たのでしようか。」と伸上るので、お嬢さんも連れられて目を遣つた。

この場末の、冬日の中へ、きらびやかとも言つづく顕われたから、怪しいまで人の目を驚かした。が、話の続きでも、学生を悩ました一筋の黒髪とはいささかも関係はない。勿論揃つて男で、変な人で、三人である。

並んだ、その真中のが一番脊が高い。だから偉大なる掌の、親指と、小指を隠して、

三本に箔を塗り、彩色したように見えるのが、横通りへは抜けないで、ずんずん空地の前面を、このお伽堂へ押し来た。

下駄と下駄の音も聞える。近づいたから、よく解る。三人とも揃いの黒羽二重の羽織で、五つ紋の、その、紋の一つ一つ、円か、環の中へ、小鳥を一羽ずつ色絵に染めた詠えで、着衣も同じ紋である。が、地は上下とも黒絁で、質素と堅実を兼ねた好みに見えた。しかし、袴は、精巧平か、博多か、りゆうとして、皆見事で、就中その脊の高い、顔の長い、色は青黒いようだけれども、目鼻立の、上品向きにのつぺりと、且つしおらしいほど口の小形なのが、あまつさえ、長い指で、ちよつとその口元を圧えているのは、特に緞子の袴を着した。

盛装した客である。まだお膳も並ばぬうち、譬喩にもしろ憚るべきだが、密と謂おう。——緞子の袴の襷とるよりも——とさえいうのである。いわんや……で、綾の見事さはお目立つが、さながら紋緞子の野袴である。とはいえ、人品にはよく似合つた。

この人が、塩瀬の服紗に包んだ一管の横笛を袴腰に帯びていた。貸本屋の女房がのつけない、薦僧と間違えたのはこれらしい。……ばかりではない。

一人、骨組の巖丈した、赤ら顔で、疎髻のあるのは、張肱に竹の如意を掲げ、

一人、目の窪んだ、鼻の低い頤あごの尖とがつたのが、紐に通して、牙彫げぼりの白髑髏しやれこうべを胸から斜ななめに取つて、腰に附けた。

その上、まだある。申合わせて三人とも、青と白と緋なйма交ぜの糸の、あたかも片かた襷だすきのごときものを、紋附の胸へ顕著たいに帯した。

いずれも若い、三十許少わすかに前後。氣を負い、色熾さかんに、心を放つ、血氣のその燃ゆるや、男くさは格別であろう。

お嬢さんは、上氣した。

処へ、竹如意ちくによいと、白髑髏である。

お嬢さんはまた少し寒氣がした。

横笛だけは、お嬢さんを三人で包んで立つた時、焦茶の中折帽を真俯うつむ向けに、爪皮つまかわの掛かつた朴齒ほおばの日和下駄を、かたかたと鳴らしざまに、その紋緞子の袴の長い裾を白足袋で緩はく匆はねて、真中の位置をずれて、ツイと軒下を横に離れたが。

弱い咳をすると、口元を蔽おほうた指が離れしなに、舌を赤く、唇をべろりと舐なめた。  
貸本屋の女房は、耳みみたぶ朶たぶまで真赤まっかになつた。

写真館の二階窓で、葱しのぶの短冊とともに翻ひるがえつた舌はこれである。

が、接吻と誤つたのは、心得違いであろう。腰の横笛を見るがいい。たしなみの樂の故に歌口をしめすのが、つい癖になつて出たのである。且つその不断の特異な好みは、齒を染めているので分る。女は氣味が悪かろうが、そんなことは一向構わん、艶々として、と見た目に、舌まで黒い。

## 十二

「何とかいったな、あの言種は。——宴会前で腹のすいた野原では、見るからに唾を飲まざるを得ない。薄皮で、肉充満という白いのが、妾だろ、妾に違いない。あの、とろりと色氣のある工合がよ。お伽堂、お伽堂か、お伽堂。」

竹如意が却つて一竹篋食ひとしつべいくらいそうなことを言う。そのかわり、悟つた道人のようなあつはツはツはツ。

「その、言種がよ、「ちとお慰みに何ぞごらん遊ばせ。」は悩ませるじゃないか。借問す貸本屋に、あんな口上、というのがあるかい。」

「柄にあり、人により、類に応じて違うんだ。貸本屋だからと言って、股引ももひきの尻端折しりはしより

で、読本の包みを背負つて、とことこと道を真直ぐに歩行いて来て、曲尺形に門戸を入つて、「あ、本屋でござい。」とばかりは限るまい。あいつ妾か。あの妾が、われわれの並んで店へ立つたのに対して、「あ、本屋とござい。」と言つて見ろ、「知つてるよ。」といつて喧嘩になりか、嘘にもしろ。」とその髑髏を指で弾く。

「いや、その喧嘩がしたかつた。実は、取組合いたいくらいなものだつた。「ちと、お慰みにごらん遊ばせ。」……おまけに、ほつと紅くなつた、怪しからん。」

「当る、当る、当るといふに。如意をそう振廻わしちや不可んよ。」

豆腐屋の親仁が、売声をやめて、このきらびやかな一行に見惚れた体で、背後に廻つたり、横に出たり、ついて離れて歩行くのが、この時一度後へ退つた。またこの親仁も妙である。青、黄に、朱さえ交つた、麦藁細工の朝鮮帽子、唐人笠か、尾の尖つた高さ三尺ばかり、鯨の尾に似て非なるものを頂いて。その癖、素銅の矢立、古草鞋というのである。おいしい事に、探偵ものだと、これが全篇を動かすほど働くであろう。が、今のチンドン屋の極めて幼稚なものに過ぎない。……しばらくあつて、一つ「とうふイ、生揚、雁もどき」……売声をあげて、すぐに引込む筈である。

従つて一行三人には、目に留めさせるまでもなければ、念頭に置かせる要もない。

「あれが仮に翠帳すいちようにおける言語に見ろ。われわれが、もとの人間の形を備えて、ここを歩行あゆるいていられるわけのものじゃないよ。斬るか、斬られるか、真剣抜打の応酬なくんばあるべからざる処を、面壁九年、無言の行だ。——どうだい、御前ごぜん、この殿様。」

「お止よしよ、その御前、殿様は。」

と、横笛の紋緞子が、軽くその口を圧おさえて、真中まんなかに居て二人を制した。

「あれだからな、仕方をしたり、目くばせしたり、ひたすら、自重謹厳を強要するものだから、止やむことを得ず、口を箝かんした。」

「無理はないよ、殿様は貸本屋を素見ひやかしたんじゃない。——見合の気だ。」

とまた髑髏を弾く。

「串戯じょうだんじゃありません。ほほほ。」

「ああ、心臓の波打つ呼吸いきだぜ、何しろ、今や、シャッターを切らむとする三人の姿勢を崩して、窓口へ飛出したんだ。写真屋も驚いたが、われわれも啞然とした。何しろ、奢おごるべし、今夜の会には非常なる寄附をしろ。俵くるまがそれなり駆抜けないで、今まで、あの店に居たのは奇縁だ。」

「しかし、我輩は与くみしない。」

「何を。」

「寂しい、のみならず澄まし切ってる、冷然としたものだ。」

「お上品さ、そこが殿様の目のつけ処よ。」

十三

「……何しろ、不思議な光景だった。かくして三人が、ほとんど無言だ。……」

「ほとんど処か全然無言で。……店頭みせさきをすすとすと離れ際に、「帰途かえりに寄るよ。」はいさ

さか珍だ。白い妾に対してだけに、河岸の張見世はりみせを素見すけんの台辞せりふだ。」

「人が聞きますよ、ほほほ、見つともない。」

と、横笛しわぶきが咳する。この時、豆腐屋の唐人笠が間近くその鼻を撞つかんとしたからである。

「ところで、立向って赴く会場が河岸の富士見楼で、それ、よくこの頃新聞にかくではな  
いか、紅裙こうくんさ。給仕の紅裙が飯田町だろう。炭屋、薪屋まきや、石炭揚場の間から蹴出しを翻  
して顕われたんでは、黒雲の中にひらめく風情さ。羅生門に髻髯ほうふつだよ。……その竹如意  
はどうだい。」

「如意がどうした。」

と竹如意を持直す。

「綱が切つた鬼の片腕……待てよ、鬼にしては、可厭いやに蒼白あおしろい。——そいつは何だ、講釈師がよく饒舌しゃべる、天保水滸伝てんぼうすいこでん中、笹川方の鬼剣士、平手造酒猛虎ひらてみきたけとらが、小塚原こづかっぱらで切取つて、袖口に隠して、千住こつの小格子を素見ひやかした、内から握つて引張ひっぱると、すぼんと抜ける、女郎を気絶きせつさせた腕に見える。」

「腰の髑髏むくろが言わせますかね。いうことが殺風景に過ぎますよ。」

「殿様、かつぎたまうかな。わはは。」

と揺ゆすり笑わらいをする、腰の髑髏むくろの歯も笑う。

「冷く澄んでお上品な処に、ぞつこんというんだから、切つた、切つたが気になるんだ。」

「いや、縁はすぐつながるよ。会のかえりに酔払よひつて、今夜、立たち処どころに飛込むんだ。お

でん、鍋焼なべやき、驕おごる、といつて、一升買いちしょうわせて、あの白い妾めかけ。」

「肝腎かんじんの文金が、何、それまで居るものか。」

「僕はむしろ妾めかけに与くみする。」

三崎座のぼりの幟ぼりがのどかに揺れて、茶屋の軒のつくり桜が野中に返咲かえきの霞かすみを視みせた。おも

ては静かだが、場は大入らしい、三人は、いろいろの幟の影を、袴で波形に乗って行く。

「また何か言われそうな気がしますがね、それはそれとしてだね、娘が借りるらしかった——あの小説を見ましたかね。」

「見た、なお且つ早くから知っている。——中味は読まんが、口絵は永洗だ、艶えんなものだよ。」

「そうだ、いや、それだ。」

竹如意が歩ある行きざまの膝を打って、

「あの文金だがね、何だか見たようでいて、さつきから思出せなかつたが、髑むく髑むくが言うので思出した。春頃出たんだ、『閨けいしゆう秀小説』というのがある、知ってるかい。」

「見ないが、聞いたよ。」

「樋口一葉、若松賤しずこ子——小金井きみ子は、宝玉入の面紗パールでね、洋装で素敵な写真よ、その写真が並んだ中に、たしか、あの顔、あの姿が半身で出ていたんだ。」

「私もそうらしいと思うですがね、ほほほ。」

「おかしいじゃないか、それにしちや、小説家が、小説を、小説の貸本屋で。」

「ほほほ、私たちだって、画師えかきの永洗の絵を、絵で見るじゃありませんか。」

「あそうか、清麗楚楚とした、あの娘が、引抜くと鬼女になる。」

「戻橋だな、扇折の早百合とくるか、凄いで、さては曲者だ。」

と、気競つて振返ると、髑髏が西日に燃えた、柘榴の皮のようである。連れて見返つた、竹如意が茶色に光つて、横笛が半ば開いた口の歯が、また黒い。

三人の影が大きく向うの空地へ映つたが、位置を軽く転ずれば、たちまち、文金に蔽いかかりそうである。鳥がカアと鳴いた。

こうなると、皆化ける。安旅宿の辻の角から、黒鴨仕立の車夫がちよろりと鯰のような天窓を出すと、流るるごとく俥が寄つた。お嬢さんの白い手が玉のようのにびて、軒はずに衝と招いたのである。と、緋羽の蹴込敷へ棲はずれ美しく、ゆうぜんの模様でない、雪なす山茶花がちらりと上へかくれた。

#### 十四

しかり、文金のお嬢さんは、当時中洲辺に住居した、月村京子、雅名を一雪といつて、実は小石川台町なる、上杉先生の門下の才媛なのである。

ちよつとした緊張にも小さき神は宿る。ここに三人の凝視の中に、立って俾を呼んだ手の、玉を伸べたのは、宿れる文筆の氣の、おのずから、美しい影を顕わしたものであろう。あたかも、髑髏と、竹如意と、横笛とが、あるいは燃え、あるいは光り、あるいは照らして、各々自家識見の象徴を示せるごとくに、

そういえば——影は尖つて一番長い、豆腐屋の唐人笠も、この時その本領を發揮した。余り随いて歩行いたのが疾しかったか、道中へ荷を下ろして、首をそらし、口を張つて、

——「とうふイ、生揚、雁もどき。」——  
唐突に、三人のすぐ傍で……馬鹿な奴である。

またこの三人を誰だ、と思う？……しかしこれは作者の言よりも、世上の大なる響に聞くのが可からう。——次いで、四日と経たないうちに、小川写真館の貸本屋と向合つた店頭に、三人の影像が掲焉として、金縁の額になって顕われたのであるから。

——青雲社、三大画伯、御写真——

よつて釈然とした。紋の丸は、色も青麦である。小鳥は、雲雀である。

幅広と胸に掛けた青白の糸は、すなわち、青天と白雲を心に帯した、意氣衝天の表

現なのである。当時、美術、絵画の天地に、氣昂り、意熱して、麦のごとく燃え、雲雀のごとく翔つた、青雲社の同人は他にまた幾人か、すべておなじ装をしたのであった。

ただしこれは如実の描写に過ぎない。ここに三画伯の扮装を記したのを視て、術奇、表異、いささかたりとも軽佻、諷刺の意を寓したりとせらるる読者は、あの、紫の顱巻で、一つ印籠何とかの助六の氣障さ加減は論外として、芝居の入山形段々のお揃をも批判すべき無法な権利を、保有せらるべきものであらねばならない。

ついでにいう。ちようどこの時代——この篇、連載の新聞の挿絵受持で一座の清方さんは、下町育ちの意気なお母さんの袖の裡に、博多の帯の端然とした、襟の綺麗な、眉の明るい、秘蔵子の健ちゃんであつたと思う。

さて続いて、健ちゃんに、上野あたりの雪景色をお頼み申そう。

清水の石磴は、三階五階、白瀬の走る、声のない滝となつて、落ちたぎり流るる道に、巖角ほどの人影もなし。

不忍へ渡す橋は、玉の欄干を築いて、全山の樹立は真白である。

これは——翌年の二月、末の七日の朝の大雪であつた。——  
昨夜、宵のしとしと雨が、初夜過ぎに一度どつと大降りになつて、それが留むと、陽気もほつと、近頃での春らしかつたが、夜半に寂然と何の音もなくなると、うつすりと月が朧に映すように、大路、小路、露地や、背戸や、竹垣、生垣、妻戸、折戸に、密と、人目を忍んで寄添う風情に、都振なる雪女郎の姿が、寒くば絹綿を、と柳に囁き、冷い梅の蒼はもとより、行倒れた片輪車、掃溜の破筵までも、肌すく白い袖で抱いたのである。が、由来宿業として情と仇と手のうらかえす雪女郎は、東雲の頃の極寒に、その気色たちまち變つて、拳を上げて、戸を煽り、廂を鼓き、袂を飛ばして棟を蹴た。白面皓身の夜叉となつて、大空を駆けめぐり、地を埋め、水を消そうとする。……  
今さかんに降っている。

## 十五

……盛に降っている。

たてに、斜に、上に、下に、散り、飛び、煽ち、舞い、漂い、乱るる、雪の中に不忍の

池なる天女の楼台は、絳碧の幻を、梁の虹に鏤め、桜柳の面影は、靨黷たる瓔珞を白妙の中空に吹靡く。

巖しき門の礎は、霊ある大魚の、左右に浪を立てて白く、御堂を護るのを、詣るものの、浮足に行潜ると、玉敷く床の奥深く、千条の雪の簾のあなたに、丹塗の唐戸は、諸扉 両方に細めに展げ、錦の帳、翠藍の裡に、銀の皿の燈明は、天地の小白に凝つて、紫の油、朱燈心、火尖は金色の光を放つて、三つ二つひらひらと動く時、大池の波は、さながら白蓮華を競つて咲いた。

——白雪の階の下に、ただ一人、褰を折り緊め、跪いて、天女を伏拝む女がある。すぐ傍に、空しき蘆簣張の掛茶屋が、埋れた谷の下伏せの孤屋に似て、御手洗がそれに続き、並んで二体の地藏尊の、来迎の石におわするが、はて、この娘はの、と雪に顔を見合わせたまう。

見れば島田鬻の娘の、紫地の雨合羽に、黒天鵝絨の襟を深く、拝んで俯向いた頸の皓

吹乱す風である。洪蛇目傘を開いたままで、袖摺れに引着けた、またその袖にも、霏々と降りかかつて、見る見る鬢のおくれ毛に、白い羽子が、ちらりと来て、とまつて消えて

は、ちらりと来て、消えては、飛ぶ。

前髪にも、眉毛にも。

その眉の上なる、朱の両方の円柱に、

……妙吉祥……

……如蓮華……

一聯の文字が、雪の降りつもる中に、瑠璃と、真珠を刻んで、清らかに輝いた。

再び見よ、烈しくなつた池の波は、ざわざわとまた亀甲を聳てる。

といううちに、ふと風が静まると、広小路あたりの物音が渡つて来て、颯と浮世に返る

と、枯蓮の残んの葉、折れた茎の、且つ浮き且つ沈むのが、幾千羽の白鷺のあるいは

み、あるいは眠り、あるいは羽搏つ風情があつた。

青い頭、墨染の僧の少い姿が、御堂内に、白足袋でふわりと浮くと、蟬燭が灯を点じ

た。二つ三つまた五つ、灯さきは白く立つて、却つて檐前を舞う雪の二片三片が、薄

紅の蝶に翻つて、ほんのりと、娘の臉を暖めるように見える。

「お蟬をあげましてござります。」

「は。」

僧は中腰に会釈して、

「早朝より、ようお詣り……」

「はい。」

「寒が強うござります、ちとおあがりになつて、御休息遊ばせ。」

この僧が碧牡丹へきぼたんの扉の蔭へかくれた時、朝詣あさもうでの娘は、我がために燈明の新しい光を見守つた。

われら、作者なかまの申合わせで、ここは……を入れる処であるが、これが、紅べにで印刷が出来ると面白い。もの言わず念願する、娘の唇の微かすかに動くように見えるから。黒ぼちぼち々々では、睫毛まつげの顫ふるえる形にも見えない。見えても、と短いようで悪いから、紙費ついでだけれど、

「白にする。」

## 十六

時に、伏拝むのに合せた袖口の、雪に未開紅の風情だったのを、ひらりと一咲き咲かせて立つて、ちよつとおくれ毛を直した顔を見ると、これは月村一雪、——中洲のお京であ

つた。

実は――

「……小説が上手に書けますように……」

どうも可訝おかしい、絵が上手になりますように、踊おどが、浄瑠璃じようるりが、裁縫おしごとが、だともよく解きこえるけれども、小説は、他ほかに何とか祈念ほかにのしようがありそうに思われる。作者だつてそう思う。人生の機微きびに針はりの尖さきで触ふれますように、真理を鋭刀メスで裂ききますように、もう一息、世界の文豪を圧倒おさしますように……でない、承知の出来ない方々が多いと思う。が、一雪のお京さんは確たしかに前条のごとくに祈念したのである。精確な処は、傍かたえに真白まっしろに立たせたまえる地蔵尊ぢざうそんに、今からでも聞かせるが可いい。

なお、かし本屋の店頭でもそうだし、ここでの紫の雨合羽ぬりに、塗ぬりの足駄あしだなど、どうも尋た常だな娘で、小説家らしい処がない。断髪はなみで、靴くつで、頬辺ほおべが赤くないと、どうも……らしくない。が、硯友社けんゆうしゃより、もつと前、上杉先生などよりなお先に、一輪、大きく咲いたという花形あけぼのの曙女史あけぼのと聞えたは、浅草の牛肉屋の娘で――御新客ごしんき、鍋なべで御酒ごしゆ――帳場ちやうばばかりか、立込たてこむと出番でしばんをする。緋鹿子ひがのこの襷たすき掛がけで、二の腕うでまで露呈あらかに白い、いささかも黒くろ人ららしくなかつたと聞いている。

また……ああ惜しいかな、前記の閨秀小説が出て世評一代を風靡した、その年の末。秋あわれに、残しの葉の、胸の病の紅い小枝に縫ったのが、凧に儂く散った、一葉女史は、いつも小机に衣紋正しく筆を取り、端然として文章を綴ったように、誰も知りまた想うのである。が、どういたして……

——やがてこのあとへ顔を出す——辻町糸七が、その想う盾の裏を見せられて面食った。糸七は、一雑誌の編輯にゆかりがあつて、その用で、本郷丸山町、その路次が、（あしき隣もよしや世の中）と昂然として女史が住んだ、あしき隣の岡場所で。……

——おい、木村さん、信さん寄つておいでよ、お寄りといったら寄つても宜いではないか、また素通りで二葉屋へ行く気だろう——

にはじまつて、——ある雨の日のつれづれに表を通る山高帽子の三十男、あれなりと取らずんば——と二十三の女にして、読書界に舌を巻かせた、あの、すなわちその、怪しからん……しかも梅雨時、陰惨としていた。低い格子戸を音訪れると、見通しの狭い廊下で、本郷の高台の崖下だから薄暗い。部屋が両方にある、茶の間かと思う左の一層暗い中から、ひたひたと素足で、銀杏返のほつれながら、きりりとした蒼白い顔を見せた、が、少し前屈みになつた両手で、黒縹子と何か腹合せの帯の端を、ぐい、と取つて、腰を

斜めに、しめかけのままかまち櫃へ出た。さて、しやんとしま緊ったところが、（引掛ひっかけ、）また、（じれった結び）、腰の下した緊じめへずれ下った、一名（まおとこ結び）というやつ、むすび方の称とえを聞いただけでも、いまでは町内で棄て置くまい。差配たちどころが立た 処ところに店たなだてを啖くわせよう。

——「失礼な、うまいなり、いいえね、余りくさくさするもんですから、湯呑で一杯……てつたところ……黙つてて頂戴。」——

端正どころか、これだと、しごきで、頽たいげん然としていた事になる。もつとも、おいらんの心中などを書く若造を対手あいてゆえの、心易さの姐娘あねごの挙動ふるまいであつたらうも知れぬ。

——「今日は珍らしいんです、いつも素見ぞめき大勢。山の方から下りていらっしやる方、皆さん学者、詩人連でおいで遊ばすでしょう。英語はもとより、仏蘭西フランスをどうの、独乙ドイツをこの、伊太利語イタリー、……希臘ギリシヤ拉甸ラテン……」——  
と云つて、にっこり笑つたそうである。

が、山から下りて来るといふ、この人々に対しては、（じれった結び）なぞ見せはしない、所帯ぎれのした昼夜帯も（お互に貧乏で、相向つた糸七も足袋の裏が破れていた。）きちんと胸高なお太鼓に、一銭が紫むらさきこ 粉で染返しの半襟も、りゆうと紗綾形さやがた見せたであ

ろう、通力自在、嬢娘の腕は立派である。

——それにつけても、お京さんは娘であつた。雪の朝の不忍の天女詣は、可憐く、可愛  
い。

## 十七

お京は下向の、碧玳瑁、紅珊瑚、粧門の下で、ものを期したるごとくしばらく  
人待顔にイんだのは誰がためだろう。——やがて頭巾を被つた。またこれだけでも一仕事で、  
口で啣えても藤色縮緬を吹返すから、頤へ手繰つて引結うのに、撓つた片手は二の腕ま  
で真白に露呈で、あこがるる章魚、太刀魚、烏賊の類が吹雪の浪を泳ぎ寄りそうで、  
危つかしい趣さえ見えた。

——ついでに言おう。形容にもせよ、章魚、太刀魚はいかがだけれど、烏賊は事実居た  
……透かして見て広小路まで目は届かずとも、料理店、待合など、池の端あたりにはふら  
ふらと泳いでいたろう——

その頃は外套の襟へ三角形の羅紗帽子を、こんな時に、いや、こんな時に限らない。

すつぽりと被るのが、寒さを凌ぐより、半分は見得で、帽子の有無では約二割方、仕立上りの値が違う。ところで小座敷、勿論、晴れの席ではない、卓子台の前へ、右のその三角帽子、外套の態で着座して、左、褌を折捌いたの、部屋着を開けたのだが、さしむかいで、盃洗が出るとなつては、そのままいきなり、泳いで宜しい、それで寄鍋をつつくうちは、まだしも無鱗類の餌らしくて尋常だけれども、沸爛を、めらめらと燃やして玉子酒となる輩は、もう、妖怪に近かった。立てば槍鳥賊、坐れば真鳥賊、動く処は、あおり鳥賊、と拍子にかかる、また似たものが外にあつた。

季節はそれるが、その形は、油蟬にも似たのである。

——月府玄蟬——上杉先生が、糸七同門の一人に戯に名づけたので、いう心は月賦で拵えた黒色外套の揶揄である。これが出来上つた時、しかも玉虫色の皆絹裏がサヤサヤと四辺を払って、と、出立つた処は出来したが、懐中空しゅうして行、処がない。まさか、蕎麦屋で、かけ一、御酒なしでも済まない、苦心の結果、場末の浪花節を聞いたという。こんなのは月賦が必ず滞る。……洋服屋の宰取の、あのセルの前掛で、頭の禿げたのが、ぬかるうものか、春暖相催し申候や否や、結構なお外套、ほこり落しは今のうち、と引剥いで持つて行くと、今度は蟬の方で、ジイジイ鳴、噪いでも鬚、棹の先へも

掛けないで、けろりと返さぬのがおきまりであつた。

——弁持<sup>べんもち</sup>十二——というのも居た。おなじ門<sup>もん</sup>葉<sup>よう</sup>の一人で、手弁で新聞社へ日勤する。月給十二円の洒落<sup>しやれ</sup>、非ず真剣を、上杉先生が笑つたのである。

ここに——もう今頃は、仔細<sup>しさい</sup>あつて、変な形でそこいらをのそついているだろう——辻町糸七の名は、そんな意味ではない。

上杉先生の台町とは、山……一つ二つあなたなる大塚辻町に自炊して、長屋が五十七番地、渠<sup>かれ</sup>自ら思いついた、辻町はまずいい、はじめは五十七、いそなの磯菜。

「ヘン笑かすぜ、」「にやけていやがる、」友達が熱笑冷罵する。そこで糸七としたのである。七夕の恋の意味もない。三味線<sup>さみせん</sup>の音色もない。

その糸七が、この大雪に、乗らない車坂あたりを段々に、どんな顔をしていよう。名を聞いただけでも空<sup>すき</sup>腹<sup>はら</sup>へキヤリと応える、雁<sup>がん</sup>鍋<sup>なべ</sup>の前あたりへ……もう来たろう。

お京の爪<sup>つま</sup>皮<sup>かわ</sup>が雪を噛<sup>か</sup>んで出た。まつすぐに清<sup>きよ</sup>水<sup>みづ</sup>下の道へは出ないで、横に池について、棲<sup>すま</sup>はするすると捌<sup>さば</sup>くが、足許の辿<sup>たど</sup>々<sup>たど</sup>しき。

寒い、めつきり寒い。……

氷月と云う汁粉屋の裏垣根に近づいた時、……秋は七草で待遇もてなしたろう、枯尾花に白い風が立つて、雪が一捲ひとまき頭巾を吹きなぐると、紋の名入の緋葉もみじがちらちらと空に舞った。お京の姿は、傘もたわわに降り積り、浅黄で描いた手弱女たおやめの臙おほろよ夜深き風情である。

「あら、月村さん。」

紅入ゆうぜんすその裳も蹴開くばかり、包ましい腰の色気も投棄うしろてに……風はその背後から煽あおっている……吹靡ふきなびく袖で抱込むように、前途ゆくてから飛着いた状さまなる女にょしやう性があつた。

濃緑こみどりの襟巻に頬を深く、書生羽織で、花月巻の房々したのに、頭巾は着ない。雪からかさの傘かさの烈はげしく両手に揺るとともに、唇で息を切つて、

「済みません、済みませんでした、お約束の時間におくれツちまいました。」

「まあ、よくねえ。」

と、此方こなたも息を吻ほつしながら、

「これではどうせ——三浜みはまさん、来いらっしやらないと思つたもんですから、参詣おまいりを先に済ませて、失礼でしたわ。」

「いいえ、いいえ。」

「何しろこの雪でしょう、それに私などと違って、あなたはお勤めがおありになりますから。」

「ところが、ですの。」

とまた一息して、

「私の方こそ、あなたと違って、歩行くのも、動くのも、雨風だって、毎日体操同然なんでございますものね。」

と云った。「教え子」と題した、境遇自叙の一篇が、もう世に出ていた。これも上杉先生の門下で。——思案入道殿の館に近い処、富坂辺に家居した、礪川小学校の訓導で、三浜渚女史である。年紀はお京より三つ四つ姉さんだし、勤務が勤務だし、世馴れて身の動作も柔かく、内輪の裡にもおのずから世の中つい通り——ここは大衆としようか——大衆向の艶を含んで、胸も腰もふつくらしている。

「わけなし、疾くに支度をして、この日曜だというのに袴まで穿きましたんで、風がありますからですが。この雪と来て、あなたは不断お弱いし……きつとお出掛けなさりはないだろう、と一人で極めて、その袴も除けてき、まあ。ご丁寧に、それで火鉢に嘸りつ

いたんですけど……そうでもない、ほかの事とは違って、お参詣まいりをするのに、他所よその方が、こうだから、それだから、どうの、といつては勿体なし……一人でも、と思いますと、さあ、あなたも同じ心でお出掛けになったかも知らない。——急に火鉢の火のつくように、飛上つて、時間がおくれた、大変だ。お待合わせを約束の仲町ちやうを出た、あの大時計が雪の塔、大吹雪の峠の下に、一人旅で消えそうに亱たつていらつしやるのが目さきに隠現ちらつくもんですから、一息に駆出すようにして来たんです。氣ばかり急いで。」

と、顔をひたと合わせそうに、傘からかさを横に傾けたので、耳にまで飛ぶ雪を、鬢びんを振つて、払い、はらい、

「この煙とも霧とも霽もやとも分らない 卍まんじ巴ともえの中に、ただ一人、薄うすりとあなたのお姿を見ました時は、いきなり胸で引包ひつつんで、抱いてあげたいと思いましたよ。」

「抱かれない、おほほ。」

と口紅が小さく白く、雪に染まつた。

「え？」

ただの世辞ではなかつたが、おもいがけないお京の返事が胸を衝ついたから、ちよつと呆しよれて、ちよつと退しよつて、

「まあ、月村さん」

「おほほ、三浜さん」

「お元氣、お元氣……」

十九

渚も元氣を増したらしい。

「ですが、顔の色がお悪いわ、少し蒼ざめて。……何しろ、ここへ入って休みましょう——ええ、私のお詣りはそれから、お精進だから構いません、お汗粉ですもの。家がまた氷月ですね。気のきかない、こんな時は、ストーブ軒か、炬燵亭こたつていでもすれば可よござんすのに。」

その木戸口に、柳が一本、二人を蔽おほう被衣かつぎのように。

「閉っていたつて。」

と、少し脊伸びの及および腰こしに、

「この枝折戸しおりどの掛金は外しずしてありませう。表へだと、大廻りですものね。さあ、いら

つしやい。まこと開かなけりや四目垣ぐらい、破るか、乗越すかしちまいますわ。抱かれ  
てやろうといつて下すつた、あなたのためなら。……飛んだ門破りの板額ですわね。」

渚が傘を取直して、

「武器は、薙刀。」

「私は、懐劍。」

二人が、莞爾。

お京の方が先んじて、ギイと押すと、木戸が向うへ、一步先陣、蹴出す緋鹿子、揺の糸  
が、弱腰をしめて雪を開いた。

「おお、まあ、天晴れ。」

「と、おつしやつて下すつた処で、敵手はお汁粉よ。」

「あなたは。」

「え、私は、塩餡。」

「ご尋常……てまえは、いなか。」

「あとで、鴨雑煮。」

「驕る平家ね、揚羽の蝶のように、まだ釣葱がかかっていますわ。」

と閉つた縁の廂むさしを見つつ、急に渚が肩をよじた。

「ああ、冷い、柳の枝が背うしろから。」

肩を払うと、顔へかかるのを、片手でまた搔かき遣つて、頬をすぼめた。

「雫しずくもしないのに濡れたんですか、冷いこと。」

お京も立停たちどまつて振向いた。

「髪の毛ですわ……あら、私ンじゃない。」

しごいて、引いて、幾重にも巻取るようにした指を、離すと、すつと解けて頬を離れる。成程、渚のではない。その渚が——女だ、髪にはどこまでも目が繊細こまかい——雪を透かして、

「まあ、長い、黒い、美しい……どこまでも雪の上を。——月村さん、あなたのですよ。」

「いいえ、私。」

「良い薫もするようです。どこかに梅かしら。それ、そうですね。……頭巾をこぼれて、黒く一筋。」

「すこしは長いといいますけれど、薄いほどだつて言われますもの。」

と頭巾を解き、颯さつと頭あわられた島田の銀の丈長たけながが指ゆびさき尖さとともに揺れると、思わず傘を落した。

「気味の悪い。」

降りしきったのが小留おやみをした、春の雪だから、それほどの気色でも、霽はれると迅はやい。西空の根津一帯、藍染あいそめ川の上あたり、一筋の藍を引いた。池の水はまだ暗い。

「気味の悪い？……気味の悪い事があるもんですか。手で引いてごらんさいよ、ね、それ、触るでしょう、耳の下、ちつと横、手繰って。……そう、そう、すらすらと動きますわ、木戸の外の柳の上まで、まあ。」

「私どうしましょう。」

「結構じゃありませんか、あなたの指から、ああ鬢びんの中へ。」

と、相傘するまで、つと寄添う。

「私どうしましょう。」

と、乳のあたりへ袖を緊しめつつ、

「空から降って来やしないんでしょうか。」

「……空からでしょうよ、池からでしょうよ、天女からお授かりなすったのかも知れませぬね、羨しいったらありませんわねえ。」

「でも、私、小説が上手に出来ますように——笑わないで頂戴……そういつて拝んだんですのに。」

「じょうだんじやありません、かりにもそのくらいなものをお授かりになったんですのに。」

「半分切つてあげましょうか。」

「驚いた……誰方どなたにさ。」

「三浜さんに。」

「まあ。」

「だって、二人でお詣りに来たんですもの。」

「まあ、慾よくのおあんなさらない、可愛い、それだから私に抱かれようつて……ほんとに抱きますよ。」

「あれ、人が居ます、ほほほ。」

「ええ、そう。——もうあそこまで行きました。」

——齊ひとしく見遣みやりつた。

富士風おろしというのである。西の空はわずかに晴間を見せた。が、池の端を内へ、柵に添そつて、まだ濛もよう々と、雪ゆき 烟けぶりする中を、スイと一人、スイと、もう一人。やや高いのと低いのと、海月くらげが泳ぐような二人づれが、足はただよもののに、向ううつむけに沈ゆんで行く。

……

脊せきの高い方は、それでも外套がいとう一着で、すっぽりと中折帽なかひさかきを被かぶっている。が、寸の短い方は、黒の羽織うゑに袴はかまなし、蓑みのもなしで、見つともない、その上紋もんつき着き。やがて渚しづに聞きけば、しかも五つ紋もんで。——これは外套がいとうの頭巾かぶとばかりを木菟きみずくに被かつて、藻も抜ぬけたか、辻つ落おちたか、その魂こん魄ぱくのようなものを、片手にふらふらと提あげている。渚しづに聞きけば、竹たけの皮包かわかだ——そうであった。

「——あれ、辻つ町ちやうさんよ、ちよいと。」

「辻つ……町ちやう」

「糸七いとさんですつてば。——つい、取紛とれて、いきなり噂うわさをしようつて処ところ、おくれちまいましたんですがね、いま、さつき、現いまにいま……」

「今……」

「懐劍、といつて、花々しく、あなたがその木戸をお開けなすつた時ですよ。立停たちどまつてしばらく見ていましたんですよ、二人とも。頭巾を被つておいでだし、横吹きに吹掛けていましたから、お気がつかなくなつたんです。もつともね、すぐその前、あすこで——私はお約束の大時計より、大変な後おくれ方ですから、俵くるまをおりと、早廻りに、すぐ池の端へ出て、揚出しわきの、あの、どんだんの橋を渡つて、正面に傘つぎきを突つ撃きして来たんでしよう。ぶつかりそうに、後うしろすが 継つりに、あの二人に。

おや……帽子はすつぽりでも、顔は分りましたから、ちよつと挨拶はしましたけれど、御堂みどうの方へ心はせきます。それにお連れがまるで知らない人ですから、それなり黙つてさ。それだつて、様子を見ただけでも、お久しぶりとも、第一、お早う、とも言えた義理じゃありませんわ。」

「どうしたんでしよう、こんな朝……雪見とでもいうのかしら。」

「あなたもあんまりお嬢さんね。——吉原の事を随筆になすつたじやありませんか。」

「いやです、きまりの悪いこと。……親類に連れられて、浅草から燈籠とうろうを見に行つただけなんです、玉菊の、あの燈籠のいわれは可哀あわれですわね。」

「その燈籠は美しく可哀だし、あの落武者……極きまつていますよ、吉原がえりの落武者は、

みじめにあわれだこと。あの情ない様子つたら。おや、立停りましたよ、また——それ、こつちを見ています。挨拶——およしなさい、連がありますから。どんなことを言出そうも知れませんが。糸七さん一人だつて、あなたは仲が悪いんでしょう。おなじ雑誌に、その随筆の、あの人、悪口を記いたじやありませんか。」

「よくご存じですこと。」

簪を挿込むと、きりりと一文字にひそめた眉を、隠すように、傘を取つて、熟と、糸七とその連を視た。

## 二十一

「しかし、しかしだね、（雪見と志した処が、まだしも）……何とかいったつけ、そうだ（……まだしも、ふ憫だ。）」

「あわれ、憫然というやつかい。」

「やつぱり、まだしも、ふ憫だ。——（いや、ますます降るわえ、奇絶々々。）と寒さにふるえながら牛骨が虚飾をいうと（妙。）——と齒を喰切つて、骨董が負惜しみに受

ける処だ。

またあたかも三馬の向島の雪景色とおなじように、巻込まれた処へ、(骨董子、向うから来るのは確に婦人だけ。)と牛骨がいうと、(さん候この雪中を独歩するもの、俳気のある婦人か、さては越の国にありちゆう雪女なるべし、)備お針か、産婆だろう、とある処へ。……聞いたら怒るだろう、……バツタリ女教師の渚女史にぶつかつたなどは――

(奇絶、奇絶。) 妙……とお言いよ。」

「言えないよ。女作家の事はまた、べつとして……馬鹿々々しいよ。」

「三馬(式亭)が馬鹿々々しい、といつて……女郎買に振られて帰つたこの朝だ。 俵くるまち

賃なしの大雪に逢つて、翻訳ものの、トルストイや、ツルゲネーフと附合つたり、ゲー

テ、シルレルを談じたつて、何の役に立つものか。そこへ行くと三馬だ。お馴染がいに

くらか、景気をつけてくれる。――「人間万事嘘誕計」――骨董と牛骨が向島へ雪見

の洒落で、ふられた雪を吹飛ばそう。」

「外聞の悪いことをいうなよ、雪は知らないが、ふられたのは俺じゃないぜ。」

と、大島の小袖に鉄無地の羽織で、角打の紐を縦に一扱き扱いたのは、大学法科出の

新学士。肩書の分限に依つて職を求むれば、速に玄関を構えて、新夫人にかしずかるべき

処を、僻<sup>へき</sup>して作家を志し、名は早く聞えはするが、名実あい合<sup>かな</sup>わず、碎いて言えば取入<sup>みいり</sup>が少いから、かくの始末。藍染川と、忍川の、晴れて逢つても浮名の流れる、茅<sup>かやちよう</sup>町<sup>ちよう</sup>あたるの借屋に帰つて、吉原がえりの外套を、今しがた脱いだところ。姓氏は矢野弦光<sup>げんこう</sup>で、対手<sup>あいて</sup>とは四つ五つ長者である。

さし向つて、三馬とトルストイをごつちやに饒舌<sup>しゃべ</sup>る、翻譯者からすれば、不埒<sup>ふらち</sup>ともいふべき若いのは、想像でも知れた、辻町糸七。道づれなしに心中だけは仕兼ねない、身のまわり。ほうしよの黒の五つ紋（借りもの）を鴨居<sup>かめい</sup>の釘<sup>はぎと</sup>に剥取られて、大名縞とて、笑わせ、よれよれ銘<sup>めい</sup>仙<sup>せん</sup>の口綿一枚。素肌の寒さ。まだ雪の雫<sup>しずく</sup>の干<sup>ひ</sup>ない足袋は、ぬれ草鞋<sup>わらじ</sup>のように脱いだから、素足の冷たさ。実は、フランネルの手首までの襯衣<sup>しゃつ</sup>は着て出たが、洗濯をしないから、仇<sup>あだ</sup>汚<sup>よご</sup>れて、且つその……言い憎いけれど、少し臭う。遊女<sup>おいらん</sup>に嫌われる、と昨宵<sup>ゆうべ</sup>行きがけに合<sup>あ</sup>乗<sup>のり</sup>俵<sup>のり</sup>の上で弦光がからかったのを、酔った勢い、幌<sup>ぼろ</sup>の中で肌脱ぎに引きかなぐり、松源の池が横町にあるあたりで威勢よく、ただし、竜どころか、蚤<sup>のみ</sup>の刺<sup>ほ</sup>りもの青もなしに放り出した。後悔<sup>おつ</sup>をしても追附かない。で、弦光のひとり寝の、浴衣をかさねた木綿<sup>どてら</sup>広袖<sup>くくる</sup>に包まって、火鉢にしがみついて、肩をすくめていたのであった。

が、幸<sup>さいわい</sup>に窓<sup>あかる</sup>は明い。閉め込んだ障子も、ほんのりと桃色に、畳も小庭の雪影に霞を敷い

た。いま、忍川の日も紅くれないを解ひき、藍染川の雲も次第に青く流れていよう。不しのばず忍の池の風情が思われる。

上野の山も、広小路にも、人と車と、一いっつき斉わに湧わき動じよめ揺ゆいて、都大路を八方へ溢あふれる時、揚出しの鍋は百人の湯気を立て、隣となりぢか近ちかな汁粉屋、その氷月の小座敷には、閨秀二人が、雪も消えて、衣紋えもんも、襖つまも、春の色にやや緩とけたであろう。

先さつき刻きに氷月の白い柳の裏木戸と、遠見の馬場の柵際と、相望んでから、さて小半時経たっている。

崖下ながら、ここの屋根に日は当るが、軒ひさしも廂ひさしもまだ雪をしないから、狭いのに寂然しんとした平屋の奥の六畳に、火鉢からやや蒸気いきれが立たつて、炭の新しいのが頼たもしい。小鍋立こなべだてという洒落に見えるが、何、無精たらしい雇やといばあ婆あさんの突掛つっかけの膳ぜんで、安ものの中皿ちゅうばんに、葱ねぎと菘こん蕪やくばかりが、堆うずたかく、狩野派末法の山水を見せると、傍かたわらに竹の皮の突張つっぱった、牛の並肉あかの朱はみでく溢あり出した処は、未来派尖鋭の動物を思わせる。

「仰せにや及ぶべき。そうよ、誰も矢野がふられたとは言やしない。今朝——先刻のあの形は何だい。この人、帰したくない、とか云って遊女が、その帯で引張るか、階子段の下り口で、遁げる、引く、くるくる廻って、ぐいと胸で抱合った機掛に、頬辺を押しつけて、大きな結綿の紫が垂れ掛っているじゃないか。その顔で二人で私を見て、ニヤニヤはどうしたんだ、こつちは一人だけ。」

「そうはずけずけとのたまうな、はははは談じたまうなよ、息子は何でも内輪がいい。……まずお酌だ。」

いかな首尾だか、あのくらい雪にのめされながら、割合に元気なのは、帰宅早々婆さんを使い、角店の四方から一升徳利を通帳という不思議な通力で取寄せたからで。……これさえあれば、むかしも今も、狸だつて酒は吞める。

二人とも冷酒で呷った。

やがて、小形の長火鉢で、爛もつき、鍋も掛つたのである。

「あれはね、いいかい、這般の瑣事はだ、雪折笹にむら雀という処を仕方ですつたばかりなんだ。——除の二の段、方程式のほんの初歩さ。人の見ている前の所作なんぞ。——望む処は、ひけ過ぎの情夫の三角術、三蒲団の微分積分を見せたかった……といううちに

も、何しろ昨夜は出来が悪いのさ。本来なら今朝の雪では、遊女も化粧を朝直しと来て、青柳か湯豆腐とあろう処を、大戸を潜つて、迎も待たず、……それ、女中が来ると、祝儀が危い……。一目散に茶屋まで仲之町を切つて駆けこんだろう。お同伴は、と申すと、外套なし。」

「そいつは打殺したのを知つてる癖に。」

「萌した悪心の割前の軍用金、分つているよ、分つている……いるだけに、五つ紋の雪びたしは一層あわれだ、しかも借りものだと言つたつげかな。」

「春着に辛うじて算段した、苦生の一張羅さ。」

「苦生?……」

「知つてるじゃないか、月府玄蟬、弁持十二。」

「好い、好い。」

「並んだ中にいつも陰気で、じめじめして病人のようだからといって、上杉先生が、おなじく渾名して——久須利、苦生。」

「ああ、そう、久須利か。」

「くせえというように悪いから、皆で、苦生、苦生だよ。」

「さてまたさぞ苦る事だろう、ほうしよは折目摺れが激しいなあ。ああ、おやおや、五つ紋の泡が浮いて、黒の流れに藍が兀げて出た処は、まるで、藍瓶の雪解だぜ。」

「奇絶、奇絶。——妙とお言ひよ。」

「妙でないよ、また三馬か。」

「いい爛だ。そろそろ、トルストイ、ドストイフスキーが煮えて来た。」

「やけを言うなというに。そのから元気を見るにつけても、年下の息子を悩ませ、且つその友達を苦しめる、（一張羅だと聞けばかなしも。）我ながら情ない寂しい声だな。——

懺悔をするがね。茶屋で、「お傘を。」と言つたろう。——「お傘を」——家来どもが居

並んだ処だと、この言は殿様に通ずるんだ、それ、麻袴か、黒羽二重袴で、すつと

翳す、姿は好いね。処をだよ。……呼べば軒下まで俵の自由につく処を、「お俵。」とな

ぜいわない。「お傘。」と来ては、茶屋めが、お互の懐中を見透かした、俵賃なし、と

睨んだり、と思つたから、そこは意地だよ、見得もありか、土手まで雪見だ、と仲之町で

袖を払つた。」

「私は、すぼめた。」

「ははは、借りものだっけな、皮肉をいうなよ。息子はおとなしく内輪が好い。がっらつ

ら思うに、茶屋の帳場は婆さんか、痘痕あはたの亭主に限ります。もつともそれじゃ、繁昌はしまいがね。早いから女中はまだいびき軒で居る。名代の女房の色っぽいのが、長火鉢の帳場奥から、寝乱れながら、艶々とした円まるまげ鬚で、脛はぎも白やかに起きてよ、達手だてまき巻ばかり、引掛けた羽織の裏にも起居たちいの膝にも、浅黄あさぎ縮緬ちりめんがちらちらしているんだ。……

## 二十三

つれづれ草の作者に音が似ているから、法師とも人が呼ぶ、弦光法師は、盃さかずきを置き息を吐いて、

「しかも件くだんの艶なのが、あまつさえ大概番傘の処を、その浅黄をからめた白い手で、蛇目じや傘のめと来た。祝儀なしに借りられますか。且つまたこれを返す時の入費おそろが可恐しい。ここしばらくあてなしなんだからね。」

「そこで、雪の落おちゆうど人となつたんだね。私は見得も外聞も要らない。なぜ、この降るのに傘を借りないだろうと、途中では怨んだけれど、外套の頭巾をはずして被かぶせてくれたのには感謝した、烏帽子えぼしをつけたよう景気が直った。」

「白く群がる朝返りの中で、土手を下りた処だったな。その頭巾の紐をしめながらどこで覚えたか——一段と烏帽子が似合いて候。——と器用な息子だ。しかも節なしはありがたかった。やがて静の前に逢わせたいよ。」

「静といえよ。」

「乗出すなよ。こいつ、昨夜の遊女か。」

「そんなものは名も知らない。てんで顔を見せないんだから。」

「自棄をいなよ、そこが息子の辛抱どころだ。その遊女に、馴染をつけて、このぬし辻町様（おん箸入）に、象牙が入って、蝶足の膳につかなくつちや。……もつともこの箸、

万客に通ずる事は、口紅と同じだがね、ははは。」

「おつて教授に預ろうよ。そんな事より、私のいうのは、昨夜それ引前を茶屋へのたり込んだ時、籠洋燈の傍で手紙を書いていた、巻紙に筆を持添えて……」

「写真、写真。」

「目の凜とした、一の字眉の、瓜実顔の、裳を引いたなり薄い片膝立てで黒縮緬の羽織を着ていた、芸妓島田の。」

「うむ、それだ。それは婀娜なり……それに似て、これは素研清楚なり、というのを

不忍の池で。……」

と、半ば口で消して、

「さあ、お酌だ。重ねたり。」

「あれは、内芸者というんだらう。ために傘を遠慮した茶屋の女房なぞとは、較べものにならなかつたよ。」

「よくない、よくない量見だ。」

と、法師は大きく手を振って、

「原稿料じゃ当分のうち間に合いません。稿料しかず不如傘二本か。一本だと寺を退ひく坊主になるし、三本目には下り松か、遣切やりきれない。」

と握にぎりこぶし拳で、猫板ドンとやって、

「糸ちゃん！ お互にちつと植上げをする工夫はないかい。」

と、喟然きぜんとして歎じて、こんどは、ぐたりとその板へ肘ひじをつく。

「へい、へい、遅おそわりましてござります。」

爪の黒ずんだ婆さんの、皺しわ頸くびへ垢あか手拭てぬぐいを巻いたのが、乾からびた葡萄ぶどう豆まめを、小皿にし  
て、元はげた汁椀を二つ添えて、盆を、ぬい、と突出した。片手に、旦那様穿はきか換えの古足袋

を握っている。

「ああ、これだ。」と、喟然として歎じて、こんどは、畳へ手をついた。

この傭やといにさえ、弦光法師は配慮した。……俵賃には足りなくても、安肉四半斤……二十匁以上、三十匁以内だけの料はある。竹の皮包を土産らしく提げて帰れば、廓さとから空腹すきばらだ、とは思うまい。——内証だが、ここで糸七は実は焼芋を主張した。糧かてと温おんじやく石と凍かて餓おんじやく共に救う、万全の策だったのである、けれども、いやしくも文学者たるべきものの、紅ル玉ビド、綠エメラルド宝玉、宝玉を秘め置くべき胸から、黄色に焦げた香においを放って、手を懐ふところ中に暖めたとあつては、蕎麦屋そばやの、もり二杯の小婢まえだれの、ぼろ前垂まえだれの下に手首を突込むのと軌を一にする、と云つて斥しりぞけた。良策の用いられざるや、古今敗亡のそれこそ、軌を一にする処である。

が、途中まず無事に三橋まで引上げた。池の端となつて見たがいい、時を得顔の梅柳が、行つたり来たり緋縮緬てすりに、ゆうぜんに、白いものをちらちらと、人を悩す朝である。はたそれ、二階の欄干てすり、小窓などから、下界を覗のぞいて——野郎めが、「ああ降つたる雪かな、あの二人のもの、簞みを着れば景色になるのに。」——婦おんなめが、「なぜまた蜆しじみを売らないだろう。」と置炬燵おきこたつで、白魚鍋しらおなべでも突つつかれてみる、畜生！吹雪に倒るればといつて、

黒塀かきわりの描割かきわりの下が通れるものか。——そこで、どんどんから忍川の柵内へ、池のまわり、雪の原へ迷込んだ次第であつたが。……

## 二十四

「ありがたい、この、汁レルから湯気が立つ。」

と、味噌椀の蓋を落して、かぶりついた糸七が、

「何だ、中味は芋※殻いもがらか、下手な飜訳ひんやくみたいだね。」

「そういうなよ、漂母せんぼの餐さんだよ。婆やの里から来たんだよ。」

「それだから焼芋を主張したのに、ほぐして入れると直ぐに実みになる。」

「仲之町の芸者の噂のあとへ、それだけは、その、焼芋、焼芋だけはあやまるよ。」

と、弦光つむりが頭を下げた。

同感である。——糸七のおなじ話でも、紅玉ルビー、緑宝玉エメラルドだと取次栄とけえがするが、何分焼芋

はあやまる。安つばいばかりか、稚氣わかまが過ぎよう。近頃は作者なにかま夥間なにかまも、ひとりぎめに偉く

なつて、割前の宴のみかい会の座敷でなく、我が家の大広間で、脇きょうそく息きょうそくと名づくる殿様道具の

おしまぎぎ  
凡に倚つて、近う……などと、若い人たちを頗で磨く剽軽者さえあると聞く。仄に聞くにつけても、それらの面々の面目に係ると悪い。むかし、八里半、僭称して十三里、一名、書生の羊羹、ともいつた、ポテト……どうも脇息向の饌でない。

ついでこの間の事——ある大書店の支配人が見えた。関東名代の、強弓の達者で、しかも苦勞人だと聞いたが違くない。……話の中に、田舎から十四で上京した時は、鍛冶町辺の金物屋へ小僧で子守に使われた。泥濘で、小銅五厘を拾った事がある。小銅五厘也、交番へ届けると、このお捌きが面白い、「若、金鍰を食うが可かつ。」勇んで飛込んだ菓子屋が、立派過ぎた。「余所へ行きな、金鍰一つは売られない。」という。そこで焼芋と、活機きつかけに作者が、

「三つ。」

声と共に、啊あうんの呼吸で、支配人が指を三本。……こうなると焼芋にも禅がある。

が、何しろ、煮豆だの、芋※殻だのと相並んで、婆やが持出した膳もさめるし、新聞の座がさめる。ものが清新でないのである。

不精髯ぶしょうひげも大分のびた。一つ髪でも洗つて来ようと、最近人に教えられ、いくらか馴染

になった、有楽町辺の大石造館十三階、地階の床屋へ行くと、お帽子お外套というも極きまりの悪い代しろものが釘ぼたんで棚へ入つて、「お目金、」と四度半が手近てばこな手函すわへ据すわる、齒科のほかでは知らなかつた、椅子がぜんまいでギギイと巻上る……といった勢いきおい。しゃぼんの泡は、糸七が吉原返りに緒をしめた雪の烏帽子ほどに被かぶさる。冷い香水がざつと流れる。どこか場末の床とこみせ店せが、指さきの尖さきで、密そつとクリームを扱こいて掌てで広げて息で伸ばして、ちよんぼりと髯ひげ剃かあとへ塗ぬる手際てがわなどとは格別の沙汰で、しかもその場末より高くない。

お職人が念のために、分け目を熟じつと瞻みると、奴やつこ、いや、少年の助手が、肩から足の上まで刷毛はけを掛ける。「お麿そまつさま末様。」とお世話でした。「と好いい気持きもちになって、扉ドアを出ると、大理石の床続きの隣、パール（真珠）と云うレストランに青衿せいぎんきん菫衣きんぎょいの好女子ひとりあり、緑りよく扉ひらに倚よりて佇たたずめり。

「番町さん。」

「……………」

「泉さん。」

驚おどろいて縮めた近目の皺しわを、莞爾にっこり……でもって、鼻の下まで伸ばさせて、

「床屋へお入いりなつたのを……どうもそうらしいと思つたもんですから、お帰り時分を待

つていたの、寄つてらつしやいよ。」

「は、いや、その。」

ああ、そうか、思い出した。この真珠パールの本店が築地の割かつぼう烹懷石で、そこに、月並に、懇意なものの会がある。客が立込んだ時ここから選抜えりぬきで助けすに來た、その一人である。

「どこかへいらつしやる、ちよつと紅茶でも。」

面喰めんくらつた慌あわただしい中にも、忽然として、いつぞのむかし吉原の横町の、ずるずる引摺ひきずつた青い裳すそと、紅あかい扱帶しじきと、脂やにくさ臭におい吸おいつけ煙草を憶おも起いすと、憶起おもす要はないのに、独りで恥しくなつて、横を向いた。

「お可い厭や。」

「飛んでもない。」

「あら、ご挨拶。」

「飛んでもない。可い厭やなものかね。」

「お世辞のいいこと、熱あつかん爛らんも存じております。どうぞ——さあいらつしやい。」

「人が見ては厭いやなんでしょう。お馴なれなさらない場所ですから。——あいにく三組ばかり宴会があつて、多勢お見えになつていますから。……ああと……こつちが可いわ。」

拙者生れてより、今この年配としで、人見知りはしないというのに、さらさら三方をカーテンで囲つて、

「覗のぞいちゃ不可いけません。」

何事だろうと、布目を覗く若い娘こをたしなめて、内の障子より清純きれいだというのに、卓てえぶ子掛るかけの上へ真新しいのをまた一枚敷いて、その上を撓しなつた指で一のし伸して、

「お紅茶？」

「いや、酒です、爛を熱く。」

「分つていますわ。」

「それから、勿論食べます。」

「お無駄をなさらないでも。」

「食べますとも、空腹です。そこで、お任せ、という処だけれど、鳥を。」

「蒸焼にしましょう、よく、火を通して。」

それまで御存じか、感謝を表して、一札すると、もう居なくなる。

すつと入交いれかわったのが、瞳めの大きい、色の白い、年の若い、あれは何と云うのか、引ひき緊まったスカートで、肩が膨ふわりと胴が細ほそって、腰の肉置ししおき、しかも、その豊ゆたかなのがりんりんとしてゐる。

「私も築地で……先日は。」

乳のふくらみを卓テエブル子こに近く寄せて朗かに莞爾にっこりした。その装よそおいは四辺あたりを払はって、泰西の物語に聞く、少年の騎士の爽なに鎧よろいったようだ。高靴かかとの踵かかとの尖とがりを見ると、そのままポンと蹴けて、馬に騎のって、いきなり窓の外を、棟を飛んで、避雷針の上へ出そうに見える。

カーネーション、フリージヤの陰へ、ひしやげた煙管きせるを出して点つけようとしていたが、火燧マッチをパツとさし寄せられると、かかる騎士に対して、脂やに下さる次第しだいには行ゆかない。雁がんく首びを俯うつむ向けにして、内端うちわに吸すいつけて、

「有難う。」

と、まず落着こうとして、ふと、さあ落着かれぬ。

「はてな、や、忘れた。」

「え。」

「下足札。」

吃驚びつくりしたように顔を見たが、

「そこに穿はいていらつしやるじやないの。」

実は外套を預けた時、札を貰わなかったのを、うっかりと下足札。ああ、面目次第もな  
い。

騎士ナイトが悟つて、おかしがつて、笑う事笑う事、上身をほとんど旋廻して、鎧よろいの腹筋はらすじを  
振よる処へ、以前のが、銚子を持参。で、入れかわるように駆出した。

「お帽子ステッキも杖も、私が預つたじやありませんか。安心してめしあがれ。あの方、今日は会  
計係、がちやがちやん、ごトンなの。……お酌をしますわ。」

やがて少々、とろりとなつて、「さてそこへ立つていちや、ああ成程——風紀上もつとも、尤もつとも  
す……と、従つて杯は。」

「さあ。（あたりを忍び目、カーテンばかり。）ちよつと一杯ひとつぐらい……お盃洗がなくて  
不可いけませんわね。」

「いや、特に感謝します、結構です。」

「あの、番町さん。私あの辺を知っていますわ。——学院の出ですもの。」

「ほう、すると英学者だ、そのお酌では恐縮です、が超恐縮で、光榮です。」

焼を念入に注意したが、もう出来たろうと、そこで運はこびだ出した一枚は、胸を引いて吃驚するほどの大皿に、添えものが堆うずたかく、鳥の片かた股もも、譬たとえ喩えはさもしいが、それ、支配人が指を三本の焼芋を一ひとつ束つかねにしたのに、ズキリと脚がついた処は、大江山の精進日の尾頭ほどある、ピカピカと小刀ナイフ、肉フオーク叉ク、これが見事に光るので、呆れて見ていると、あがりにくくば、取分けて、で、折返して小さめの、皿に、小形小刀の、肉叉フオークがまたきらりと光る。

「ご念の入った事で……光榮です、ありがたい。」

「……お気にめして……おいしいこと。……まあ、嬉しい。それはね、手で持って、めしあがって、結構よ。」

「構かまいませんか、そいつは可いい、光榮です。」

仰おおせに従うと、口のまわりが……

「はい、お手拭。」

お会計はあちらで、がちやがちやがちゃんの方なんですが……ここで……分つていきますからと、鉛筆を軽く紙片に走らせた。

この会計だが、この分では、物価騰とうしょう昇寒みぎりさの砌かたずみ、堅炭かたずみ三俵が処と観念ほぞの臍ほぞを固めたのに、

「おうう、こんな事で。……光栄です。」

「お給仕の分もついておりますから、ご心配なく。」

「いよいよ光栄です。」

と思わず口へ出た。床屋の分を倍額に、少し内へ引込んだのである。ここにおいて、番町さんの、泉、はじめて悠然として、下足を出口へ運ぶと、クローク（預あずかりしよ所）とかで、青衿が、外套を受取つて、着せてくれて、帽子、杖ステッキ、またどうぞ、というのが、それ覚えてか、いつのこと……。後朝きぬぎぬに、冷い拳固を背中へくらったのとは質たちが違う。

噫あゝ、噫あゝ、世も許し、人も許し、何よりも自分も許して、今時も河岸をぞめているのであつたら、ここでぶツつりと数珠を切る処だ！……思えば、むかし、夥間なかもの飲友達の、遊び呆ほうけて、多しばらくよりつ日寄附しほらくよりつかなかつた本郷の叔母さんの許もとを訪ねたのがあつた。お柏で寝る夜具より三倍ふつくらした坐蒲団すわりぶとん。濃いお茶が入つて、お前さんの好きな藤村の焼ぎんと

んだよ、おあがり、今では宗旨が違うかい。連雀れんじやくの藪蕎麦が近いから、あの佳味おいしの  
で一銚子、と言われて涙を流した。親身の情……これが無銭ただである。さても、どれほどの  
好男いいおとこに生れ交つて、どれほどの金子かねを使つたら、遊んでこれだけ好遇もてるだろう。――  
しかるにもかかわらず、迷いは、その叔母さんに俸賃ゆづを強請ゆすつて北廓ななかへ飛んだ。耽溺たんでき、  
痴乱、迷妄めいもうの余り、夢とも現うつつともなく、「おれの葬礼とむらいはいつ出る。」と云つて、無理  
心中かと、遊女おいらんを驚かし、二階中を騒がせた男がある。

これにつけ、またそれよ、壹岐殿坂で鼠の印いんを結んでより、雪の中を傘なしで、池の端  
まで、などと云うにつけても、天保銭を車に積んで切通しを飛んだ、思案入道殿の方が柄  
が大きい。……その意気や、仙台、紀文を凌駕りようがするものである。

と、大理石の建物にはあるまじき、ひよろひよるとした楽書らくがきの形になって、たたず  
お濠ほりの方から、円タクが、するすると流して来て、運転手台から、仰向けあおもむに指を三本出し  
た。

「これだ。」

外套の袖を浮せて膝をたたいた。番町は、何のために、この床屋へ来たんだ。あまりそ  
こらに焼芋にほいの匂においがするから、気をかえようと髪を洗いに来たのである。そうだ、焼芋の事

を、ここにちなんで（真珠）としよう。

ものは称呼となえも大事である。辻町糸七が、その時もし、真珠、と云つて策を立てたら、弦光も即諾して、こま切ぎれ同然な竹の皮包は持たなかつたに違いない。雪に真珠を食あに充て、真珠をもつて手を暖むとせんか、含がんぎ玉鳳炭よくほうたんの奢侈しゃし、蓋けだし開元天宝の豪華である。

即時、その三本に二貫たして、円タクで帰つたが、さて、思うに大分道草——（これも真珠としよう）——真珠を食つた。

茅町の弦光の借屋の膳の上には、芋がらの汁と、葡萄豆ぼつちり、牛鍋には糸菘蕪さかんばかりが、火だけは盛さかんだから炎天の蚯蚓みみずのようだ、焦げて残っている、と云つた処で、真珠を食つたあとだから、気が驕おごつて、そんなものには、構つておられん。

本文を取急とせごう。

その主意たるや、要するに矢野弦光が、その日、今朝、真しんもつて、月村一雪、お京さんの雪の姿に惚れたのである。

一升徳利の転がったを枕にして、投足の片膝組みの仰向けで、酒の酔を陰に沈めて、天井を睨にらんでいたのが、むつくり、がばと起きると、どたりと凭より掛かつたまま、窓下の机をハタと打つた。崖下の雪解の音は余所よそよりも……

いま、障子外の雨落の雫がこの響きで匆ねそうであった。

「糸的。」

「ええ、驚いた。」

この方は、袖よじれに横倒れで、鉄張りの煙管を持った手を投出したまま、吸殻を忘れてらしい、畳に焼焦——最も紳士の恥すべきこと——を拵えながら、うとうとしていた。

「呼んだぐらいで驚いてくれちゃ困る。よ、糸的、いい名だなあ、従兄弟に聞えて、親身のようなだ。そのつもりで聞いてくれよ。ああ私は実は酔わん、酔えなかつたんだよ。生れて三十年にして、いま目が覚めた。——ついてはだ。」

## 二十七

「——賛成だ、至極いいよ。私たち風来とは違って、矢野には学士の肩書がある。——御縁談は、と来ると、悪く老成じみるが仕方がない……として、わけなく絡るだろうと思うがね、実はこのお取次は、私じゃ不可いよ。」

「そう、そう、そう来るだろうと思つたんだ。が、こうなれば刺違えても今更糸的に譲つ

て、指を銜くわえて、引込みひっこはしない。」

と、わざとらしいまで、膝の上で拳こぶしを握ると、糸七は気けもない顔で、

「何を刺違えるんだ、間違えているんだらう。」

「だってそうじゃないか、いつか雑誌に写真が出ていたそうだが、そんなものはほとんど眼中になかった。今朝の雪は不意打さ。俵で帰ると、追分で一生の道が南北へ分れるのを、ほんとうに一呼吸という処で、不思議な縁で……どうも言う事が甘つたるいが、どうもどうも、腹の底まで汁粉に化けた。」

——氷月の雪の枝折戸しおりどを、片手ざしの洩蛇目傘しふじやのめで、衝ついて入るように褌つまを上げた雨衣あまぐの裾の板じめだか、鹿子絞りだか、あの緋色がよ、またただ美しさじゃない、清さ、と云つたら。……ここをいうのだ、茶屋の女房の浅黄縮緬のちらちらなぞは、突つくるみものよせぎれ寄切よせぎれだよ、……目も覚め、心むねに沁しみようじゃないか。

……同時に、時々ときの出入りとまでしばしばでなくても、同門の友輩ともだちで知合ちあつてる系けい的てきが、少くとも、岡惚れを。」

「その事かい、何だ。」

と笑いもカラカラと五徳に響いて、煙管はたを払はいた。

「対手は素人だ、憚りながら。」

「昨夜振られてもかい。」

「勿論。」

「直言を感謝す。」

と俯向いて、袖口をのぼすように膝に手を長く置き、

「人壮なる時は、娘に勝ち、人衰うる時は女房が欲しい。……その意気だ。が、そうすると、話に乗ってくれるのに、また何が不都合だろう。」

「月村と性が合わないんだ。先方は言うまでもなからうが、私も虫が好かないんだ。前にね、月村が随筆を書いた事がある。燈籠見に誘われて、はじめて廓を覗いたというんだがね、雑誌の編輯でも、女というと優待するよ。——年方の挿絵でね、編中の見物の中に

月村の似顔の娘が立っている。」

「素晴らしいね。早速捜そう。」

「見るんなら内にあるよ。その随筆だがね、足が土についていない。お高く中洲の中二階、いや三階あたりに。——政党出の府会議員——一雪の親だよ——その令嬢が、自分一人。女は生れさえすりや誰でも処女だ、純潔なのに、一人で純潔がって廓の売色を、汚れた、

頼れた、浅ましい、とその上に、余計な事を、あわれがつて、慈善家がつて、異う済まして、ツンと気取った。」

「おおお念入りだ。」

「そいつが癩しやくに障しやったから。——折から、焼芋（訂正）真珠を、食過ぎたせいとか、私が脚か気けになつてね。」

「色気がないなあ。」

「祖母としよりに小豆を煮て貰つて、三度、三度。」

「止よせよ、……今、酒を追加する……小豆は意気を銷しやうちん沈しんせしめる。」

「意気銷沈しやうしんより脚気衝しやうしん心こが可恐こわかつたんだ。——そこで、その小豆を喰いながら、私わたいらが、売女うりめなら、どうしよつてんだい、小姐ちいねえさん、内々の紐ひもが、ぶら下つたり、爪つめの掃除そうじをしない方が、余程よっぽど汚れた、頼れた、浅ましい。……塩しほみがきの私わたしらを大きにお世話だ、お茶でもあがれ、とべつかつこをして見せた。」

「そうだろう、べつかつこでなくつちや筋すぢは通とらない。まともに弁べんじて、汚れた売女うりめを憎にくんだのじゃない、あわれんだに……無理はないから。」

「勿論もちろん、つけた題だいが『べつかつこ。』さ——」

「見たいな、糸七……本名か。」

「まさか——署名は——江戸町河岸の、紫。おなじ雑誌の翌月の雑録さ。令嬢は随。……野郎は雑。——編輯部の取扱いが違うんだ。」

「辛うじて一坂越したよ、お互に、静かに、静かに。」

弦光は一息ふツ、日のあたる窓下の机の埃を吹き、吹いた後を絹切で掃った。

二十八

「それでも、上杉先生の、詞成堂——台町の山の屋敷の庭続き崖下にある破借家……矢野も二三度遊びに行つたね、あの塾の、小部屋小部屋に割居して、世間ものの活字にはまだ一度も文選されない、雑誌の半面、新聞の五行でも、そいつを狙つて、鷹の目、梟の爪で、待機中の友達のね、墨色の薄いのと、字の拙いのばかり、先生にまだしも叱正を得て、色の恋のと、少しばかり甘たれかかると、たちまち朱筆の一棒を啖うだけで、気の吐きどころのない、嶋を負う虎、壁裏の蝙蝠、穴籠の熊か、中には瓜子という可憐なもの、気ばかり手負の荒猪だろう。」

見す見す一雪女史に先を越されて、畜生め、でいる処へ、私のその『べっかつこ』だ、行つた！ 行つた！ 痛快！ などと喝采だから、内々得意でいたつげが——一日、久しく御不沙汰で、台町へ機嫌伺いに出た処が、三和土に、見馴れた二足の下駄が揃えてある。先生お出掛けらしい。玄関には下の塾から交代の当番で、弁持十二が居るのさ。日曜だつたし……すぐの座敷で、先生は箆笥の前で着換えの最中、博多の帯をきりりと緊つた処なんだ。令夫人は藤色の手柄の高尚な円髻で袴を持って支膝という処へ、敷居越にこの面が、ヌツと出た、と思いたまえ。」

「その顔だね。」

「この面だ。——今朝などは特に拙いよ。「糸。」縮んだよ、先生の声が激しい。「お前、中洲のお京の悪口を書いたそうだな。」いきなりだろう、へどもどした。「は、いえ、別に。」「何、何を……悪気はない。悪気がなくて、悪口を、何だ、洒落だ。黙んな、黙んな。洒落は一廉の人間のする事、云う事だ。そのつらで洒落なんぞ、第一読者に対して無礼だよ。べっかつこが聞いて呆れる。そのべっかつこという面を俺の前へ出して見ろ。うわさに聞けば、友子づれで、吉原の河岸をせせて。格子へ飛びつくというから、だぼ沙魚のようになりやがった。——弁持……」十二のくすくす笑っているのを呼びかけ

て、「溝どぶをせせて、格子へ飛びつくのは、だぼ沙魚せうごじゃない……お前はよく、くだらない事を知っている、何だっけな。」弁持が鹿爪しかづめらしく、「は、飛沙魚とびはせです、は。」「飛沙魚だ、贅ぜいたく沢だ。もぐり沙魚の子ぼうふらだ。——先方さきは女だ、娘だよ。可哀あはれそうに、（口惜くやしいか、）と俺が聞いたたら、（恥かしい、）と云つて、ほろりとしたんだ、袖で顔を隠したよ。子子こめ、女だつて友だちだ、頼みある夥間ななかまじゃないか。黒髪を腰へ捌さばいた、緋ひ緋おどしの若い女が、敵の城へ一番乗で塀際へ着いた処を、子子こが這はい上あがつて、乳の下を擦くすくつて、同じ溝どぶの中へ引込むんだ。」と……

「分つた、もう可いい、もう可いい。」

と弦光は膝も浮きそうに、火鉢の向うで、肩をわななかせて、手を振つた。

「雪のごとき、玉のごとき、乳の下を……串じょうだん戯たふにしろ、話にしろ、ものの譬諭たとえにしろ、聞きいちゃおられん。私には、今日こんにち、今朝こんちようよりの私には——ははははは。」

寂しい笑いで、

「話はおかしいが、大心配な事が出来た。糸的ことうの先生、上杉さんは、その様子じゃ大分一雪女史ひいぎが鼻ひらしい。あの容色きりようで、しんなりと肩で嬌態あまえて、机この傍そばよ。先生が二階の時などは、令夫人おだやかやや穩おだやかならずというんじゃないかな。」

「串戯じょうだんじゃない、片田舎の面癩にきびだらけの心得違こころえちがひの教員なぞじゃあるまいし、女の弟子を。失礼だ。」

「失礼、結構、失礼で安心した。しかし、一言でそうむきになって、腰のものを振廻すなよ。だから振られるんだ、遊女おいらん持てのしない小道具だ。淀屋よじやか何か知らないが、黒かの合か羽張つば張りの両提ふたつきげの煙草入たばこいれ、火皿までついでるが、何じゃ、塾まじや揃そろいかい。」

「先生に貰もらったんだ。弁持と二人さ、あとは巻まきた蓑たばこだからね。」

「何なにしろ真田さなだの郎党らうたうが秘かくし持もった張拔たんづつの短銃たんづつと来て、物騒ものさわだ。」

「こんなものを物騒ものさわがつて、一雪を細君こはるに……しつかりおしよ。月村はね、駿河台へ通つて、依田学海翁よしたまかむねに学んでゐるんだ。」

と居直ゐつた。

## 二十九

「学海翁まかむねに。」

弦光つとむくは瞪目とうもく一番いちばんした。

「まさか劍術じやあるまいな。それじや、僧正坊の術譲りと……そうか、言わずとも白氏文集。さもありません、これぞ淑女のたしなむ処よ。」

「違う違う、稗史はいしだそうだ。」

「まさか、金瓶梅……」

「紅樓夢こうろうむかも知れないよ。」

「何だ、紅樓夢だ。清代第一の艶書、翁が得意だと聞いてはいるが、待った、待った。」  
と上目づかいに、酒の呼吸いきを、ふつと吐いて、

「学海説いっせつにこうろうむをとく 一雪紅樓夢——待った、待った、第一の艶書を、あの娘こに説かれては穩かでない。」

「教ゆ。授く。」

「……教ゆ。授く。気になる、気になる。」

「施す。」

「……施す、妙だ。いや、待った。待った。」

と掌てのひらで押えて留めるとともに、今度は、ぐつと深く目を瞑つむって、

「学海施一雪紅樓夢——や不可いけえ。あの髻ひげが白い頸えり脚あしへ触るようだ。女教員渚の方は閑

話休憩として、前刻さつき入って行った氷月の小座敷に天狗てんぐの面でも掛かつていやしないか、悪く捻ひねって払子ほっすなぞが。大変だ、胸がどきどきして来たぞ。」

弦光はわざとらしく胸をわななかせたと思うと、その胸を反そらし、畳たたみ後うしろへ両の手をどさんと支ついた。

「安心するがいい。誰が紅樓夢だときめたよ、一人で慌わてているんじゃないか。一雪の習すいつてるのは水滸すいこ伝だとき、白文はくぶんでね。」

「何、水滸すいこ伝。はてな、妙齡めうれいの姿色、忽然こつねんとして劍けんき俠ぎやう下地げぢだ、うっかりしちやいられない。」

と面おもてを正しく、口元くちもとを緊しめて坐り直し、

「寝ねているうちに、ヒ首ひしゆが飛とんで首くびを攫さらうんだ、恐おそるべし……どころでない、魂こん魄ぱくをひよいと掴つかんで、血ちの道の薬くすりに持もつて行く。それも、もう他ひと事ことではない、既に今朝けさの雪ゆきの朝茶あさぢやの子こに、肝かんまで抜ぬかれて、ぐつたりとしているんだ。聞きけば聞き得えで、なお有あ難がたい。その様子ようすじゃ——調たつたとして婚こん礼れいの時ときは、薙なぎ刀なたの先さき払い、新夫人にんしきは錦にしきの帯おびに守まも刀とうというんだね。夢ゆめにでも見みたいよ、そんなのを。……

……といううちにも、糸いと的てき、糸いと的てきはひとりで目めの覚さめた顔かほをして澄すみましているが、内うちで

話した、外で逢つたという氣振も見せない癖に、よく、そんな、……お京さんいい名だなあ、その娘の駿河台の研学の科目なぞを知っているね。あいつ、高慢だことの、ツンとしているのと、口でけなして何とかじやないのかい。刺違えるならここで頼む。お互に怪我はしても、生命に別条のない決闘なら、立 処にしようと言うんだ。俺はもう目が据つている、真劍だよ。」

「相手にならないが、次第は話そう。——それ、弁持の甘き、月府の酸きさ、誰某と……久須利苦生の苦きに至るまで、目下、素人堅氣輩には用なしだ。誰が売女に好かれるか、それは知らないけれどもだよ。——塾の中に一人、自ら、新派の伊井蓉峰に「似てるです。」と云つて、頤を撫でる色白な鼻の突出た男がいる。映山先生が洩れ聞いてね、渾名して、曰く——荷高似内——何だか勘平と伴内を捏合させたようだけれど、おもしろからう。ところがこれだけが素人ばりの、大の、しんし。」

「大のしんし、いい許の息子、金ありかい。」

「お互に懷中は寂しいね、一杯おつぎよ、満々と。しんしと聞いていい許の息子は慌て過ぎる、大晦日に財布を落したようだ。簾だよ、張物に使う。……押を強く張る事経師屋以上でね。着想に、文章に、共鳴するとか何とか唱えて、この男ばかりが、ちよいちよ

い、中洲の月村へ出向くのさ。隅田おおかわに向いた中二階で、蒔絵まきえの小机の前を白魚船しらおがすぐ通る、欄干もたに凭もたれて、二人で月を視みた、などと云う、これが、駿河台へ行く一雪の日取ま  
で知しっているんだ。

黙だんまりでは相済あひままないと思おもつて、「先生わたくし、私も、京子とともに無点本の水滸伝。」上杉先生だんまが、「その隙ひまに、すいとんか、おでんを売れ。」「ははっ。」とこそは荷高にぎ似内、口をへの字あひに頤あひの下まで結んで鼻を一すすり、無念の思入で畳をすごすごと退さがる処は、旧派の花道ひっこの引込みさ。」

「三枚目だな、我がお京さんを誰だと思おもうよ、取るに足らず。すると、まず、どこにも敵の心配はなしか。」

「……とところがある、あるんだ！ 一人ある。」

弦光は猫板にぎりこぶしに握にぎり拳こぶしを、むずと出して、

「驚破すわ、驚破、その短銃たんづつという煙草入を意気込んで持直した、いざとなると、やつぱり、辻町が敵なのか。」

「噴出いけなさしちや不可いけないぜ。私は最初はなから、気にも留めていなかった、まったくだ。いまこ  
う真剣まけんとなると、黙もつちやいられない。対手あいてがある、美芸青雲派の、矢野きみも知しつて名高

い絵工だ。」

## 三十

「——野土青麟だよ。」

「あ、野土青麟か。」

「うむ、野土青麟だ。およそ世の中に可厭な奴。」

「当代無類の気障だ。」

声を逸つて、言うとともに、火鉢越に二人が思わず握手した。

(……ふと思うと、前段に述べた、作者が、真珠三枚で、書店の支配人と、ばらりの調子で声と指を合わせたと、趣を斉しゆうする。)

「絵だけ描いていれば、当人も世間も助かるものを、紫の太緒を胸高々と、紋緞子の袴を引摺つて、他が油断をしようものなら、白襟を重ねて出やがる。齒莖が真黒だというが。」

この弦光の言、——聞くべし、特説也。

「乱杭、齒くそ隠かくしの鉄漿かねをつけて、どうだい、その状さまで、全国の女子の服装を改良しようの、音楽を古代に回かえすの、美術をどうのと、鼻の尖さきで議論をして、舌で世間を嘗なめやがる。爪垢つまあかで楽譜を汚して、万葉、古今を、あの臭い息で笛で吹くんだ。生命いのち知らずが、誰にも解りこないから、歌を一つ一つ、異変、畜類な声を張り、高らかに唱うたって、続くは横笛、ひやらひゆで、緞子袴の膝を敲たたくと、一座みやわをし、ほほほ、と笑って、おほん、と反るんだ。堪たまらないと言つちやない。あいつ、鱗うろこを改めて鱗うろことすればいい、青大将め。——聞けばそいつが（次第前後す、段々解る）その三崎町のお伽堂とかで蟠とぐろを巻いて黒い舌をべらべらとやるのかい。」

「横笛は、八本の調子を、もう一本上げたいほど高い処で張つてるのさ。貸本屋へしけ込むのは、道士逸いつしん人、どれも膏切あぶらぎった髑しやれこうべ髑しやれこうべと、竹如意ちくにょいなんだよ——「ちとお慰みにごらん遊ばせ。」——などとお時の声色をそのまま、手や肩へ貸本ぐるみしなだれかか。女房がまた、背筋や袖をしなり、くなり、自由に揉もまれながら、どうだい頬辺ほっぺたと膝へ、道士、逸人の面くつを附着くつけたままで、口絵の色つぽい処を見せる、ゆうぜんが溢はみ出るなどは、地獄変相、極楽、いや天国変態の図だ。」

「図かい。」

「図だよ。」

「見料は高かろう。」

「高い、何、見料どころか、この図を視ながら、ちよんぼり髯の亭主が、「えへへ、ご壮な事だい。」勢の趣くところ、とうとう袴を穿いて、辻の角の（安旅籠）へ、両画伯を招待さ……「見苦しゅうはごわすが、料理店は余り露骨……」料理屋の余り露骨は可訝しいがね、腰掛同然の店だからさ、そこから、むすび針魚の腕、赤貝の酢などという代表的なやつを並べると、お時が店をしめて、台所から、これが、どうだい葛籠に秘め置いた小紋の小袖に、縹珍の帯という扮装で画伯ご所望の前垂をはずしてお取持さ。色紙、短冊、扇面、紙本、立どころに、雨となり、雲となり……いや少し慎もう……竹となり、蘭となる。……情流既に枯渴して、今はただ金慾、野を燎く髯だからね。向うの写真館の、それ「三大画伯お写真。」へは、三崎座の看板前、大道の皿廻しほどには人だかりがするんだから、考えたんだよ。

（——これ皆、中洲を伺い、三崎町を覗く、荷高似内の見聞して報ずるところさ。）

ところで、青麟——青麟と中洲の関係は、はじめ、ただ、貸本屋から本を借りるには、帳面へ、所番地を控える常規だ。きつと、馴染か、その時が初めかは分らないが、店頭

で見たお嬢さんの住居すまいも名も、すぐ分るだろう、というので、誰に見せる気だか薄化粧うすげつて。」

「白粉おしろいを?……遣るだろう!」

「すぼめ口に紅をつけて「ほほほ景気はどうかね。」とお伽堂へ一人で青麟あらいが躪あられたそうだ。この方は、女房の手にも足にも触りつこなし、傍へ寄ろうともしない澄まし方、納まり方だそうだが、見ていると、むかつとする、離れていても胸が悪い、口をきかれると、虫唾むしずが走る、ほほほ、と笑われると、ぐ、ぐ、と我知らず、お時こみあが胸へ嘔こみ上げて、あとで黄色い水を吐く……」

「聞いちやおられん、そ、そいつが我がお京さんを。」

「痛い、痛い。」

「あ、何度めだい、また握手した。糸こ的こうもよく一息に饒舌しやべつたなあ。」

三十一

「まず握手を解こう。両方がこう意気込んでは、青麟輩に——断つて置くが、意地にも我

慢にも、所得は違うが——彼等に対して、いやしくも、糸七、弦光二人掛りのように癪に障る。そこで、大切なその話はどうなったんだい。」

「……いづれ、その安料理屋へ青麟を請待さ。こいつは、あと二人より大分に値が違うそうだからね。その節は、席を改めまして、が、富士見楼どころだろう。お伽堂の亭主の策略さ。」

そこへ、愛読の俵、一つ飛ばば敬拝の馬車に乗せて、今を花形の女義太夫もどきで中洲の中二階から、一雪をおびき出す。」

「三崎町へ、いいえさ、地獄変相の図の中へな、ううう。」

「せき込むなよ……という事も出来るし、亭主がまた髯を捻って、「先方御親父が、府会議員とごわすれば、直接に打附つて見るも手廻しが早いでごわす。久しく県庁に勤めたで、大なり、小なり議員を扱う手心も承知でごわす。」などという段取になつてゐるそうさ。」

弦光がこの時、腕を拱いた。

「少からず煩いな、いつからだね、そんな事のはじまつてるのは。」

「初冬から年末……ははは、いやに仲人染みたぜ……そち以来だそうさ。」

「……だそうじゃ不可いよ、冷淡だよ、友達効のない。」

「頼まれたのは、今日はじめてじゃないか。」

「それにしても冷淡過ぎるよ。——したたかに中洲へ魔手が伸びているのに。」

「私は中洲が煮て喰われようが、焼いて……不可い、人道の問題だ。ただし、呼出されようが、出されまいが、喰わそうが喰わすまいが、一雪の勝手だから、そんな事は構っちゃいられん。……不首尾重つて途絶えているけれど、中洲より洲崎の遊女が大切なんだ。しかし、心配は要るまいと思う。荷高の偵察によれば——不思議な日、不思議な場合、得も知れない悪臭い汚い点滴が頬を汚して、一雪が、お伽堂へ駆込んだ時、あとで中洲の背後へ覆被さつた三人の中にも、青麟の黒い舌の臭気が頬にかかった臭さと同じだ、というのを、荷高が、またお時から、又聞、孫引に聞いている。お時でさえ黄水を吐く。一雪は舐められると血を吐くだらう、話にはなりやしないよ。」

弦光は案じ入つて、立処に年を取ること十ばかり。

「いやいや、そうでない。すべて悲劇はそこらで起る。不思議に、そんな縁の——万々あるまいが——結ぶる事が、事実としてありかねない。予感が良くない。胸が騒ぐ。……糸ちゃん、すぐにもお伽堂とかへ行つて。」

「そいつは、そいつは不可い……」

「なぜだよ、どうもお伽堂というのは、糸的しこうの知合からはじまった事らしいのに、妙に自分を除外して、荷高ばかりを廻しているし、第一、中洲がだね、二三度、その店へ行きながら、糸的しこうのうわさなぞをしないらしいのは、おかしいじゃないか。」

「ちつともしない、何にも言わない。またこつちも、うわさなんかして貰いたくないんだよ。」

——（様子を見ると、仔細しさいは什いかに、京子が『たそがれ』を借りた事など、女房は、それに一言も及ばぬらしい。）——

「ただ、いかんせん、亭主に高利の借がある。催促が厳しいんだ。亭主の催促が厳しいのに——そこを蔭たてになり、日向になり、「あなたア」などとその目でじろりと遣るだろう……白肉の柔い楯たてになつて、庇かばつてくれようという——女房を、その上に、近い頃また痛めつけた。」

「誰たれだい、髑髏むくろかい、竹如意たけにぎかい。」

「また急せき込こむよ。中洲の話になつてからというものは、どうも、骨董こつどうはあせつて不可いけない話の続きでも知れてるじゃないか。……高利の借りぬし、かくいう牛骨、私とそれに弁持十二じふにさ。」

「何だ二人でか、まさか、そんな竹如意、髑髏の亜流のごとき……」

「黙るよ、私は。失礼な、素人を馬鹿な、誰が失礼を。」

「はやまった、言のはずみだ、逸外はやまつた。その短銃たんづつを、すぐに引拵ひつつかんで引金を捻ひねくるから殺風景だ。」

「けれどもね。実は、その時の光景というのが、短銃と短刀同然だったよ。弁持と二人で、女房ひっばさを引挟ひっばさんで。」

といて、苦笑した。

### 三十二

「——何ね、義理と附合で、弁持と二人で出掛けなくちやならない葬式とむらいがあつた、青山の奥の裏寺さ。不断は不断、お儀式の時の、先生のいつけが厳しい。……というのは羽織袴わなじです——弁持も私も、銀行は同一取引の資産家だから、出掛けに、捨利すてりで一着に及んだ礼服を、返りがけに質屋の店さきで、腰を掛けながら引剥ひっばぐと、江戸川べりの冬空に——いいかね——青山から、歩行てくで一度中の橋手前の銀行へ寄つたんだ。——着流きながしと来て、

袖へ入れた、例の菓子さ、紫蘇入の塩竈が両提の煙草入と一所にぶらぶら、自焚  
の實で風に驚く……端錢もない、お葬式で無常を感じる、ここが隅田で、小夜時雨、  
浅草寺の鐘の声だと、身投げをすべき処だけれど、凡夫壮にして真昼間午後一時、風は  
吹いても日和はよしと……どうしても両国を乗越さないじゃ納まらない。弁持も洲崎に馴  
染があつてね、洲崎の塩竈……松風空風遊びという、菓子台一枚で、女人とともに涅槃  
に入ろう。……その一枚とさえいう処を、台ばかり。……菓子はこれだ、と袂から二人揃  
つて、件の塩竈を二包。……こいつには、笹川の劍士、平手造酒の片腕より女郎が反るぜ、  
痛快！ となつた処で——端錢もない。

ほかに工面のしようがないので、お伽堂へ大刀さ。

三崎町の土手を行つたり来たり、お伽堂の裏手になる。……なまじつか蘆がばらばらだ  
から、直ぐ汐入の土手が目先にちらついで、気は逸るが、亭主が危い。……古本漁りに  
留守の様子は知つてるけれど、鉄壺眼が光つては、と跼むわ、首を伸ばすわで、幸い  
あいてる腰窓から窺つて、大丈夫。店前へ廻ると、「いい話がある、内証だ。」といき  
なり女房を茶の間へ連込むと、長火鉢の向うへ坐るか坐らないに、「達引けよや。」と身  
構えた。「ありませんわ。」極つてら。「そこだ。」という、言合わせたように、両方

から詰寄るのと、両提から鉄砲張を、兩人、ともに引抜くのとほとんど同時さ、「身体から借りたんだ。」「あれえ、」といったぜ。いやみな色気だ、袖屏風で倒れやがる、片膝はみ出させた、蹴出しでね。「騒ぐな。」と言句は凄いぜ、が、二人とも左右に遁げてね、さて、身体から珊瑚の五分珠という釵を借りたんだがね。……この方の催促は、またそれ亭主が妬くといういやなものが捌んでさ、髻を掴んで、引きずって、火箸で打たれました、などと手紙を超越す、田舎芝居の責場があるから。」

「いや、はや、どうも。いや、どうも。」

屋根の雪がずると、窓下へ、どしんと響く。

弦光は坐り直して、

「出直した、出直した。この上はただ、偏に上杉さんに頼むんだ。……と云って俺も若いものよ。あの娘を拜むとも言いたくないから、似合いだとか、頃合いだとか、そこは何とか、糸的の心づもりで、糸的の心からこの縁談を思いついたようによ、な、上杉さんに。」

「分つたよ。」

「直ぐにも頼む、もう、あの娘は俺の命だから、あの娘なしには半日も——午砲！——までも生きられない。ううむ。」

うむと唸つて、徳利を枕にごろんとすると、這つた徳利が勃然と起き、弦光の頸ほんのくぼ窪くぼはころんと這つて、畳の縁へりで頭を抱える。

「討死したな。……何も功德だ、すぐにも先生の許とこへ駆附けよう。——湯に行きたいな。」

「勿論よ。清めてくれ。——婆や、湯に行く支度だ。婆や婆や。」

「ふええ。」

「あれだ、聞いたか——池の端茅町の声でないよ、麻布狸穴まみあなの音おんだ。ああ、返事と一所に、鶯を聞きたいなあ。」

やがて、水の流ながれを前にして、眩まぼゆい日南ひなたの糸桜いとざくらに、燦さん々と雪の咲いた、暖簾のれんの藍あいもぱつと明あかるい、桜湯の前へ立つた。

「糸ちゃん、望みが叶うと、よ、もやいの石鱈しやぼんなんか使わせやしない。お京さんの肌の香かほが芬ぶんとする、女持こぼこの小函こはこをわざと持たせてあげるよ。」

悚然ぞつとして、糸七は不思議に女の肌を感じた。

「昨夜ゆうべふられているんだい。」

「おや。」

背中を、どしんと撲くらわせた。

「こいつ、こいつ。——しかし、さすがに上杉先生のお仕込みだ、もてたと言わない。何だ、見ろ。耳朶みみたぶに女の髪の毛が巻きついているじゃないか。」

「頭巾を借りて被かぶつたから、矢野きよみのだよ。ああ、何だか、急に、むずむずする。」

「長いなあ、長い、細い、真漆まうるし。……口惜くやしいが、俺のはこんな美人じゃない。待てここは二瀬よ。藍染川へ、忍川へ……流すは惜しい、桜の枝へ……」——

桜の枝が、たよたよして、しずれ落ちに雪がさらさらと落ちて、巻きかけた一筋のその黒髪の丈を包んだ。

上野の山の松杉の遠く真白まっしろな中から、柳が青く綾あやに流れて、御堂みどうの棟は日の光紫に、あの氷月の背戸あたり、雪の陽炎かげろう幻の薄絹かけて、紅くれなゐの花が、二つ、三つ。

## 三十三

辻町糸七は、ぽかんとしていた仕入もの、小机わきの傍わきの、火もない炬辺ろばたから、縁を飛んで——跣足はだしで逃げた。

逃げた庭——庭などとは贅ぜいの言分。放題の荒地で、雑草は、やがて人だけに生おい茂しげった、

上へ伸び、下を這つて、芥穴ごみあなを自然に躍つた、怪しき精のごとき南瓜かぼちゃの種が、いつしか一面に生え拡がり、縦横無尽はびこに蔓り乱れて、十三夜が近いというのに、今が黄色な花ざかり。花盛りで一つも実のない、ない実の、そのあつて可い実の数ほど、大きな蝦蟇がまのそのそと這いありく。

歌俳諧や絵につかう花野茅原とは品變つて、自おのずから野武士の殺氣ころもが籠るのであるから、蝶々も近づかない。赤蜻蛉あかとんぼもツイとそれて、尾花の上から視ながめている。……その薄すすきさえ、垣根の隅に忍ぶばかり、南瓜の勢いきおは逞しく、葉の一枚も、烏を組んで伏せそうである。

——遠くに居る家主が、かつて適切なる提案をした。曰く、これでは地味が荒れ果てる、無代ただで広い背戸を皆借そうから、胡瓜きゅうりなり、茄子なすなり、そのかわり、実のない南瓜を刈取つて雑草を抜けという。が、肥料なしに、前せんざい裁もの、実入みいりはない。二十六、七の若いものに、畠はたけいじりは第一無理だし、南瓜の蔓つるは焚たきつけ附にもならぬ。町に、隠れたる本草家があつて、その用途を伝授しても、鎌もとてを買う資本がない、従つてかの女、いや、あの野郎やつぱきの狼藉ろうぜきにまかせてあるが、跳梁ちやうりやう跋扈はつこの凄じさは、時々切つて棄てないと、木戸よを攀よじ、縁側えんがわへ這いかかる。……こんな荒地は、糸七ごときに、自おのずからの禄と見えて、一方は隣地の華族邸やしきの厚い塀だし、一方は大きな植木屋の竹垣だし、この貸屋の背戸として、小

さく囲つた、まばら垣は、早く朽崩れたから杭もないのに、縁側の片隅に、がたがただれども、南瓜の蔓が開け閉てする、その木戸が一つ附いていて、前長屋総体と区切があるから、およそ一百坪に余るのが、おのずから、糸七の背戸のようになってゐる。

(——そこへ遁げた——)

糸七は、南瓜の葉を被らんばかり、驚破といえは躍越えて遁げるつもり植木屋の竹垣について、薄の根にかくれて、蝦蟇のように跼んで、遁げた抜けがらの巢を——窺えば——

——籠るのは、故郷から出て来て寄食している、糸七の甥の少年で、小説家の巢に居ながら、心掛は違う、見上げたものの大学志願で、試験準備に、神田辺の学校へ通つて、折からちようど居なかつた。

七十八歳になるただ一人、祖母ばかり。大塚の場末の——俾がその辻まで来ると、もう郡部だといつて必ず賃銀の増加を強請る——馬方の通る町筋を、奥へ引込んだ格子戸わきの、三畳の小部屋で。……ああ、他事ながらいたわしくて、記すのに筆がふるえる、遙々と故郷から引取られて出て来なすつても、不心得な小説孫が、式のごとき体装であるから、汽車の中で睡るにもその上へ白髪の額を押当てて頂いた、勿体ない、鼠穴のあ

る古葛籠ふるつづらを、仏壇のない押入の上段うわだんに据えて、上へ、お仏像と先祖代々の位牌いはいを飾つて、今朝も手向けた一銭蠟燭もんろうそくも、三分一が処で、儉約で消しめした、糸心のあと、ちよんぼりと黒いのを背せなに、日だけはよく当る、そこで、破足袋やぶれたびの継ぎものをしてござった。

さて、その、ひよいと持つて軽く置くと、古葛籠の上へも据りそうな、小さな白髪おの祖母ばあさんの起居たちいの様子もなしに、悉くわしく言えば誰が取次いだという形もなしに、土間から格子戸まで見通しの框かまちの板敷、取附とつきの縦四畳、框を仕切った二枚の障子が、すつと開いて、開いた、と思うと、すぐと閉った。穴だらけの障子紙へ、穴から抜けたように、すらりと立った、霧のような女の姿。

姿を。……

ここから、南瓜の葉がくれに熟じゅつと覗のぞくと、霧が濃くなり露のしたたる、水々とした濡色の島田鬘まげに、平打ひらうちがキラリとした。中洲のお京さん、一雪である。

糸七は、蟻ひきと踞み、

南瓜の葉がくれ、

尾花を透かして、

蜻蛉の目で。

## 三十四

——この破屋あぼらやへ、ついぞない、何しに來たろう——

來やがったろう、と言いたくらいだ。そりの合わない……というのも行き過ぎか、合うにも合わないにも妙齡としごろの女なんぞ影も見せたことのない処へ何しに來たろう。——ああ、そうか。矢野（弦光）の、通俗、首ったけな惚ほれかたを、台町の先生に直ぐ取次いだところ、「好よかろう。」と笑いながらの聲が掛かつた。先生の一言だ、「好よかろう。」は引受けたと同然だから、いずれ嬉しい返事を、と弦光も待つうちに、さあ……梅雨ごろだったか、降っていた。持崩した身は、雨にたたかれた藁わらのようになって、どこかの溝へ引掛ひっかり、くさり抜いた、しよびたれで、昼間は見つともなくて長屋居いまわり廻へ顔も出せない。日が暮れて晩おそく帰ると、牛込の料理屋から、俵夫くろまやが持つて駈かけつけたという、先生の手紙があつて、「弦光座にあり、待つ」とおつしやる。……飛とびたいにも、駈かけたいにも、俵た賃なぞもあるんじゃない、天保銭の翼も持たぬ。破傘やれがきの尻端折しりつぽしより、下駄をつまんだ素跣すはだし足が、茗みょう荷谷がだにを真黒まっくろに、切支丹坂下きりしたんざかから第六天をまつしぐら。中の橋へ出て、牛込へ潜もぐりこ込

んだ、が、ああ、後おくれた。料理屋の玄關へ俵はろが並んで、からから々と、一番の幌ほろの中から、「遅いじゃないか。」先生の声にひやりとすると、その後から、「待っていたんですよ。」という声は、令夫人。こんな処へ御同行は、見た事、聞いた事もない、と呆れた、がまた吃驚びくり。三つ目の俵かじぼうの楯たもと棒ぼうを上げた、幌ほろに覗かれた島田の白い顔が……

……あの、お京……いやに、ひつたり俯うつむ向むいた……

幌ほろの中で、どしばたして、弦光が、「辻町か、引返ひっかえして飲もう」という時、先生の俵はろがちよつとあと戻りして、「矢野は酔つてる、もう帰んな。……塾のものには誰にも黙もくっているんだぜ。」——馬鹿にも分つた、これは、見合だ。

納つたか、悦に入つたか、氣取つたか、弦光め、それきり多しばらく日顔ひつらを見せに來ない。酒でも催促するようで癪さかだからこつちからは出向でうかずと——塾では先生にお目には掛かけるが、月府、弁持、久須利、荷高の面々が列らしている。口留くちどめをされたほどだから話わは出でずと。——結婚はいつだ、とその後、矢野やに打撞ぶつかれば、「息子は世間を知らないよ、紳士、淑女しやうじよの一生の婚礼こんいだ、引きつけて対あいかた妓かたが極きまるように、そう手輕てかに行くものか、ははは。」と笑わらの、何なにだか空虛うつろさ。所帯しよたい氣きで緊しまると、笑も理りに落ちるかと思つたつけ。やがて、故郷、佐賀さかの田舎いんやの実家に、整理せいりすべき事がある、といつて、夏うち国くにに歸かえつたのが——まだ出

て来ない。それについて、御縁女、相談に来せられたかな……

糸七は臺と踞み、

南瓜の葉がくれ、

尾花を透かして、

蜻蛉の目で、

覗きながら、咄嗟とつさに心で思ううちに、框かまちの障子の、そこに立つたお京の、あでやかに何だか寂しい姿が、棲しなきさが冷いように、畳をしとしと運ぶのが見えて、縁の敷居際で、すんなりと撓しなうばかり、浮腰の膝をついた。

同時に南瓜の葉が一面に波を打って、真黄色まつきいろな鶇かもめがぱつと立ち、尾花が白く、冷い泡で、糸七の面つらを叩いた。

大塚とおりの通を、舟ふねが漕こぎ、帆が走る……

——や、あの時にそっくりだ。そうだ、しかも八月極暑すまいよ。去んぬる年、一葉女史を、福山町の魔窟まくつに訪ねたと同じ雑誌社の用向きで、中洲なかつしの住居すまいを音信おとずれた事がある。府会議員の邸と聞いたが、場処柄ばりだろう、四枚格子の意気造り。式台で声をかけると、女中も待たず、夕顔のほんのり咲いた、肌をそのままかと思う浴衣が、青白い立姿で、蘆戸よしどの蔭へ

透いて映ると、すぐ敷居際に——ここに今見ると同じ、支<sup>つき</sup>膝<sup>ひざ</sup>の七分身。紅<sup>くれなゐ</sup>、緋<sup>ひ</sup>でない、水<sup>と</sup>紅<sup>き</sup>より淡い肉色の縮<sup>ちりめん</sup>緬<sup>めん</sup>が、片端<sup>ちりめん</sup>とけざまに弛<sup>ゆる</sup>んで胸へふっさり<sup>ひ</sup>と巻いた、背<sup>しよいあげ</sup>負<sup>あげ</sup>上の不思議な色気がまだ目に消えない。

——原稿を十四五枚、言<sup>こと</sup>託<sup>つ</sup>けただけで帰ろうと思うのを、「どうぞ、」と黙つて入つてしまつた。埃<sup>ほこり</sup>だらけの足を、下駄<sup>ひっこす</sup>へ引<sup>ひ</sup>擦<sup>こす</sup>つたなり、中二階のような夏座敷へ。……団扇<sup>うちわ</sup>を出したつけな、お京も持つて。さて、何を聞いたか、饒舌<sup>しゃべ</sup>つたか、腰掛窓の机の前の大川の浪に皆流れた。成程、夕顔の浴衣を着た、白い顔の眉の上を、すぐに、すらすらと帆が通る……と見ただけでも、他<sup>よ</sup>事<sup>そ</sup>ながら、簇<sup>しんし</sup>、荷<sup>に</sup>高<sup>たか</sup>似<sup>に</sup>内のする事に、拳<sup>ふるまい</sup>動<sup>うご</sup>の似たのが、気<sup>と</sup>咎<sup>が</sup>めして、浅間しく恥しく、我身<sup>わがみ</sup>を馬鹿<sup>ののし</sup>と罵<sup>のの</sup>つて、何も知らないお京の待遇<sup>もてなし</sup>を水にした。アイスクリームか、ぶつかきか、よくも見ないで、すたすた、どかどか、がらん、うしろを見られる極りの悪さに、とツつき玄関の植込の敷石に蹴<sup>けつま</sup>躓<sup>まず</sup>いて、ひよろ、ひよろ。：

「何のぞまだ。」

心の裡<sup>うち</sup>で呟<sup>つぶや</sup>いた……

糸七は暮と踞み。

南瓜の葉蔭に……

三十五

尾花を透かして、

蜻蛉の目で。

内へ帰れば借金取、そこら一面八方塞りふさが、不義理だらけで、友達も好い顔せず、渡つて行きたい洲崎へも首尾成らず……と新大橋の真中まんなかに、ひよろ、ひよろのまままで欄干すだに縋すがつて立つと、魂が中ぶらり、心得違いの氣の入れどころが顛ひっくりかえ倒たつていたのであるから、手玉に取つて、月村に空へ投出されたように思った。一雪め、小説なぞ書かなければ、雑誌編輯の用だと云つて、こんな使いはしまいものを、お京め。と、隅田の川波びようびよう、渺々あおすだれたるに、網の大きく水脚を引いたような、斜向うの岸に、月村のそれらしい、青簾あおすだれのかかった、中二階——隣に棧橋を張出した料理店か待合の庭の植込が深いから、西日を除けて日蔭の早い、その窓下の石垣を蔽おほうて、もう夕顔がほの白い……

……時であつた。簾が巻き消えに、上へ揚ると、その雪白の花が、一羽、翡翠ひすいを銜くわえた。

いや、お京の口元に含んだ浅黄の団扇が一枚。大潮を真ま南みなみに上げ颯さつと吹く風とともに、その団扇がハツと落ちて、宙に涼しい昼の月影のようにひらひらと翻ひるると見るうちに、水面へスツと流れて、水よりも青くすらすらと橋へ寄つた。その時悚然ぞつとして、目を閉ふいで俯うつむ向むいた——挨拶おしぎをしたかも知れない。——

さて何と思つたらう……その晩だつたか、あと二三日おいてだつたか、東雲しののめの朝歸りに、思わず聞いた、「こんな身体からだで、墓詣りしてもいいだろうか。」遊女おいらんが、「仏様でしたら差支えござんすまい。御両親。」その墓は故郷にある。「お許いいなすけ婚……?」「いや、」一葉女史の墓だときいて、庭の垣根とこの常夏こなつの花、朝涼あさすずだから萎しぼむまいと、朝顔を添えた女の志を取り受けて、築地本願寺の墓地へ詣でて、夏の草葉の茂りにも、櫛しきのうらがれを見た覚えがある……

……とばかりで、今、今まで朧忘れをしていた、お京さん……が、何しに來たろう。あ、あの時の雑誌の使いの挨拶だ。

尾花を透かして、

蜻蛉の目で。……

見ていると、その縁の敷居際に膝をついたまま、こちらを視ながめたようだっけ……後姿に、

そつと立つた。真横の襖を越して、背戸正面に半ば開いたのが見える。角の障子の、その、隅へ隠れたらしい。

それは居間だ。四畳半、机がある。仕事場である。が、硯も机も埃だらけ、炉とは名のみの、炬燵の藻抜け、吸殻ばかりで、火の気もない。

右手の一方は甥の若いのが遣り放し、散らかし放題だが、まだその方へ入ってくればよかつたものをと、さながら遁出したあとの城を、乗取られたようなありさまで。——とにかく、来客——跣足のまま、素裕のくたびれた裾を悄悄として、縁側へ——下まで蔓る南瓜の蔓で、引拭うても済もうけれど、淑女の客に、そうはなるまい。台所へ廻ろうか、足を拭いてと、そこに居る娘の、呼吸の氣勢を、伺い伺い、縁端へ。——がらり、がちやがちやがちやん。吃驚した。

耳元近い裏木戸が開くのと、バケツを打ツつけたのが一時間で、  
「やーい、けいせい買のふられ男の、意気地なしの弱虫や、花嫁さんが来たつて遁げたや、ちやツ、ちやツ、ちやツ。」

……と、みそさざいのように笑つたのは、お滝と云つて、十一二、前髪を振下げた、舞みだれの蝶々鬘。色も白く、子柄もいいが、氏より育ちで長屋中のお茶ツびい。

「足をお洗いよ、さあ、ぼんやりしないで、よ、光邦様。」

けいせい買の、ふられ男の弱虫は、障子が開くと、冷汗をした。あまつさえ、光邦様。

……

五目の師匠も近所なり、近い頃氷川様の祭おまつり礼に、踊屋台の、まさかどに、附きつきりで居てから以来、自から任じて、滝夜叉たきやしやだから扱にくい。

「チチーン、シャン、チチチ、チチチン。（鼓の口真似）ポン、ポン、大宅おおやの太郎は目をさまし……ぼんやりしないでさ。」

「馬鹿、雑巾がないじゃないか。」

「まあ、この私とした事が、ほんにそうでござんした、おほほ。」

ちやツちやツ、と笑いながら、お滝が木戸をポイと出る。糸七の気早く足へ掛けたバケツの水は、南瓜にしぶいて、ばちやばちや鳴るのに、障子一重、そこのお京は、氣息けはいもしない。はじめからの様子も変だし、消えたのではないか、と足首から背筋が冷い。

衣きぬの薫が、ほんのりと、お京がすつとそこへ出た。

慌てて、

「唯今、御挨拶。」

これには、ただ身の動作で、返事して、

「おつかいなさいましな。」

と、すぐに糸七が腰かけた縁端へ、袖摺れに、色香折敷く屈み腰で、手に水色の半帕を。

「私が、あの……」

と、その半帕を足へ寄せる。

呆気にとられる。

「ね。」

「よして、よして下さい。罰が、罰が当る。」

「罰の当りますのは私の方です、私の方です。」

切った声して、

「——牛込の料理屋へ、跣足で雨の中をおいでなさいました。あの時にも、おみあしを洗

つて上げたかつたんです。」

「何の事です、あれは先生の用で駆けつけたんです。」

「でも、それだって。」

「不可い不可い、不可ません。あなたの罰はともかくも、御両親の罰が当る——第一何の洒落です。」

「洒落……」

と引息に声が掠れて、志を払退けられたように、ひざりもし拗ねた状に、身を起してお京が立った。

そこへ、お滝が飛込んで——

「あい、雑巾。あら、あら、二人とも気取ってる。バケツが引っくり返ってるじゃないの——テン、チン、嵯峨やおむろの花ざかり、浮気な蝶も色かせぐ、廓のものにつれられて、外めずらしき嵐山、ソレ覚えてか、きみさまの袴も春の朧染、おぼろげならぬ殿ぶりを、見初めて、そめて、恥かしの、森の下露、思いは胸に、」

と早饒舌りの一息にやってのけ、

「わあい……光邦、妖術にかかつて、宙に釣られて、ふらふらしてるよ。」

背中にひつたり、うしろ姿でお京が立ったのを、弱った糸七は杳くつぬぎ腕うでがないから、拭いた足を、成程釣られながら、密そつと振向いて見ると、愁うれいまぶたを瞼まぶたに含めて遣瀨やるせなさそうに、持ち忘れたもののような半帕ハンケチが、宙に薄青く、白昼まひるの燐火おにびのように見えて、寂しさの上に凄すじこいののに、すぐ目を反らして首垂うなだれた。

お滝が、ひよいと、飛んで傍そばへ来て、

「きれいなお姉ちゃん、少しお動きよ。」

「はい、動きましょう。」

と、縁をうつくしい褻つまさば捌はき、袖の動きに半帕を持添えて、お滝の掌てのひらへ、ひしと当てた。

「これ、雑巾のおうつりです。」

「あら、あら、私に。」

「でも新しいんですから。」

お滝は受けた半帕を、前髪に当て、額に当て、頬ほおずりに当て、頬ほおずり摺すりして、肩へかけ、胸に抱いだいた、その胸ではらりと拵だげ、小腕を張って、目を輝かして身を反らし、

「さてこそさてこそ、この旗を所持なすからは、問うに及ばず、将門まさかどが忘れがたみ、滝夜叉姫であろうがな。」

「何だ、あべこべじゃないか、違つてら。」

「チエエ、残念や、口おしや、かくなるうえは何をかつつまん、まこと我こそ——滝夜叉なるわ。どろんどろん、」

と、あとしぎりに、

「……帯だつて出来るわ、この半帕。嬉しい！ 花嫁さん、ありがとう、お楽しみ光邦様、どろんどろん。」

木戸も閉めないで、トンと行く。

「——何とも、かとも、言いようはありません。」

すぐにお京を招じ入れた、というよりも、お京はひとりでに、ものあつて誘うように、いま居た四畳半の縁の障子と、格子戸見通しの四畳を隔てた破襖やれがすまの角柱で相合うその片隅に身を置いたし、糸七は窓下の机の、此方こなたへ、炉を前にすると同時に、いきなり頭こうべを下げて、せき込んで言ったのである。

「何とも、かとも、いいようはありません、失礼しました。」

お京は薄い桔梗きぎょういろ色の襟を深く、俯向うつむいて、片手で胸をおさえて黙っていたが、島田を簪かんざしで畳の上へ縫つたように手をついた。

「辻町さん……私を折檻せつかんして、折檻して下さいまし。折檻して下さいまし。」

「何、折檻。」

「ええ。」

「折檻、あなたはおよそ折檻ということを知っていますか。あなたの中で、そのおからだで折檻という言葉さえ知っていますか、本では読み話では聞いて、それは知っていらつしやるかも知れませんが、何をいうんです。」

——おとし昨年か、さきおとし一昨々年、この人の筆に、かくもの優しい、たおやかな娘に、がま蝦蟇の面つらの「べつかつこ。」、それも一つの折檻か、知らず、悪たれ小僧の礫つぶてをぶつけた——いたず悪戯いたずらを。

糸七はすぐむよりも、恐れるよりも、ただ、しょうぜん悄然とするのであった。

### 三十七

上げた顔は、血が澄んで、色の白さも透通る……お京は片袖を膝の上に、

「何よりか、あの、何より先に、申訳がありません。あなたのお内へお許しも受けないで、

お言葉も受けなくて、勝手に上つて来たんですもの。」

「そんな、そんな事、何、こんな内、上るにも、踏むにも、ごらんの通り、西瓜すいかの番小屋でもありやしません、南瓜畑の物置です。」

「いいえ、いいえ、私だつて、幾度も、お玄関で。」

「あやまります、恐入ります。お玄関は弱り果てます。」

「おうかがいはしたんですけれど、しんとして、誰方どなたのお声も聞えません。」

「すぐ開き扉ど一つの内に、祖母とじよりが居ますが、耳が遠い。」

「あれ、お祖母様ばあさまにも失礼な、どうしたら可いいでしょう。……それに、御近所の方、おか

みさんたちが多勢、井戸端にも、格子外にも、勝手口にも、そうしてあの、花嫁、花嫁。

……」

「今も居ます。現に居ます、ごめんなさい。談じます。談判します、打ぶなぐります、花嫁だなんて失礼な。」

「あれ、あなた、そんな気ではありません。極きまりが悪くて、極きまりが悪くて、外へ出られな  
いもんですから、お内へ入つてかくれました。それだし、ただ、人の口の端はの串じょうだん戯だ  
けでも、嫁だなぞと、あなたのお耳へ入つたらどうしようと、私……私を見て、庭へ出て

おしまいなさいますし、私、死にたくなりました。」

と、片袖で顔をかくすと、姿も、消入る風情である。

「それが、それがです、それにわけがあるんです。何しろ、あなたを見てからではありません、見ない前に飛出したんです、——今申訳をします。待つて下さい。どうも、何しろ、周圀まわりが煩うるさい。」

軸物かけものも、何も無い、がらん堂の一つ道具に、机わきの柱にかけた、真田が短銃たんづつの兩提たつさげ。

鉄の煙管きせるはいつも座右に、いまも持つて、巻まきた 蓆たばこの空缶あきかんの粉煙草ひねを捻ひねりながら、余りの事に、まだ喫のむ隙すきを見出さなかつた、その煙管を片手に急いで立つて、机の前の肱ひじか掛窓けまどの障子を開けると、植木屋の竹垣つづきで、細い処むぐらを、葎むぐらくぐりに人は通う。

「——夜叉的こよう、夜叉的こよう。」

声の下に、鼻の上まで窓の外へ、二ツ目が出た。

「光邦様、何。」

ひやりと、また汗になりながら、

「媽々連かかあを追おっばら払おつてくれ、消おしてくれよ、妖術、魔術で。」

黙つて瞬まばたきでうなずいた目が消えると、たちまち井戸端へ飛んだと思う、総長屋の柵ますがた形なりの空地へ水輪なりにキヤキヤと声が響いた。

「放れ馬だよ、そら前町を、放れ馬だよ、五匹だ。放れ馬だよッ。」

躑あしおと音が、ばたばたばた、そんなにも居たかと思う。表通の出入口へ、どつと潮のように馳はしり退いて、居まわりがひつそりする、と、秋空が晴れて、部屋まで青い。

畳の埃も澄んだよう、炉の灰の急な白さ。背きがち、首うなだれがちに差向つたより炉の灰にうつくしい面影が立つて、その淡うすい桔梗の無地の半襟、お納戸縦たてじま縞あわせの拾あわせの薄色なのに、黒くろしゆちん縹ゆちん珍ちんに朱、藍あゐ、群ぐんじよう青じよう、白びやくぐん群ぐんで、光琳こうりん模様りんに錦葉もみじを織つた。中にも真紅に燃ゆる葉は、火よりも鮮あざやか明あに、ちらちらと、揺れつつ灰に描かるる。

それを汚すようだから、雁首で吹溜めの吸殻を隅の方へ搔こうとすると、頑固な鉄が、脇わき明あけの板じめ縮ちりめん緋ひの長襦袢ながじゆばんに危く触ろうとするから、吃びつくり驚おどろして引込ひっこめる時、引っかけて灰が立った。その立つ灰にも、留とめぎ南木の香ぶんが芬ふんと薫る。

覚えず、恍うつとり惚とする、鼻の尖さきへ、炎が立つて、自分で摺すった燐寸マツチにぎよつとした。が、しやにむに一服いっぷくまず吸つて、はじめで、一息ほつ吻くちとした。

「月村さん、あなたを見て、花嫁、いや、待つて下さい。言うのも憚はばかりますが、その花嫁

のわけなんです。——実は、今更何とも面目次第ありません、跣足で庭へ遁げましたのも、盟ちかつて言います。あなたのお姿を見てからではないのです。……

……聞いたばかり、聞いたばかりで腰も抜かさないのは、まだしもの僥倖しあわせで飛出したんです。今しがた、あなたが、大方、この長屋の総木戸をお入んなすった時でしょう。その頃です、唯今のお茶つびいが、その窓から頭を出して、「花嫁が来た。」と言ったんです。——来たらば知らしておくれよ、と不断、お茶つびいを斥候ものみ同然だったものですから、聞くか聞かないに、何とも、不状ふじょうを演じました。……いま、そのわけを話しますが。……

……煙草は……それはありがたい、お嫌きらでも、お友だちがいにも、すばすば。」

と妙に碎けて、変に勢まつて、しよげて、笑つて、すばすば。

## 三十八

「……また何も、ここへ友達を引張ひっぱり出して、それに託かけるのは卑怯ひきようですが、二月ばかり前でした。あなたなぞの前では、お話もいかがわしい悪場所の、それも獣の巢ねのような処ひっかかへ引掛ひっかかつたんです。泥々に酔つて二階へ押上つて、つい蹠跟よろけなりに梯子段はしごだんの欄干へ

つかまると、ぐらぐらします。屋台根こそぎ波を打って、下土間へ真逆に落ちようとなりました……と云った楼で。……障子の小間は残らず穴ばかり。——その一つ一つから化ものが覗いて、蛞蝓の舌を出しそうな様子ですが、ふるえるほど寒くはありませんから、まず可いとして、その隅っ子の柱に凭掛って、遣手という三途河の婆さんが、蒼黒い、瘦せた脚を突出してましてね。」

……禪というのを……控えたらしい。

「舐めちや取り、舐めちや取り、蚤だか、虱だか捻っています。——あなたも、こんな、私のようなものの処へおいで下すった因果に、何事も忘れてお聞き下さい。」

その蚤だか虱だかを捻る片手間に、部屋から下ったという蕎麦の残り、伸びて、蚯蚓のようにのたくるのを撮んじや食い、撮んじや食う。そこをまた、牙と舌を剥出して、犬ですね、狛か面の長い洋犬などならまだしも、尻尾を捲上げて、耳の押立った、瘦せて赤剥だらけなのが喘ぎながら掻食う、と云っただけでも浅ましさが——ああ、そうだ。」

糸七は煙管を落した。

「あなたの吉原の随筆は、たしか、題は『あさましきもの。』でしたね。私が飛んだ『ベツかッこ』をした。」

「もう、どうぞ。」

お京は膝に袖を千鳥に掛けたまま、雌浪めなみやわらかを柔に肩に打たせた。

「大目玉を頂きましたよ、先生に。」

「もうどうぞ、ご堪忍。」

「いや、お詫びは私こそ、いわばやつぱりあなたの罰です。その「浅ましい」一つの穴で……部屋は真暗まつくら、がたがた廊下の曲角に、洋鉄ブリキの洋燈ランプ一つ。余り情ないなさけ、「あかりが欲しい。」……「蠟燭代を別に出せ。」で、奈落に落ちて一夜あける、と勘定は一度済ましたんですが、茶を一杯にも附足しの再勘定、その勘定書を、その勘定を催促しても、わざと待たして持つて来ません。これが、ぼると言います。阿漕あこぎな術やっです。はめられたんです。といううちに、朝直し……遊蕩あそびが二度振ぶりになって、また、前勘定、このつけを出されると、金が足りない、足りないどころですか、まるで始末が出来ないので。

——「あさましきもの」が引受けてくれました、暑いのに、破屏風やぶれびようぶにすくんで、かびた蒲団に縮まったありさまは、人間に、そのまま草が生えそうです。無面目むめんぼくで廊下へ顔も出せません。お螻けらの兄さん、ちと、ご運動とか云って、「あさましきもの」に廊下へ連出されると、トトトン、トトトンと太鼓の音。それを、欄干てすりから覗のぞきますとね、漬物桶おけ

炭俵と並んで、小さな堂があつて、子供が四五人——午の日でした。お稲荷講、万年講、お稲荷さんのお初穂。「お初穂よ、」といつて、女がお捻を下へ投げると、揃つて上を向いた。青いんだの、黄色いんだの、子供の狐の面を五つ見た時は、欄干越に廂へ下つた女の扱帯が、真赤な尻尾に見えたんです。

その女が、これも化けた一つの欺で、俵まで拵えて、無事に帰してくれたんです。が、こちらが身震をするにつけて、立替の催促が烈しく来ます。金子は為替で無理算段で返しましたが、はじめての客に帰りの俵まで達引いた以上、情夫——情夫（苦い顔して）が一度きり馳の道では、帳場はじめ、朋輩へ顔が立たぬ、今日来い、明日来い、それこそ日ぶみ、矢ぶみで。——もうこの頃では、押掛ける、引摺りに行く、連れて帰る、と決闘状。それが可恐さに、「女が来たら、俵が見えたら、」と、お滝といひます……あの  
お茶つぴいに、見張を頼んで、まさか、女郎、とはいへませんから、そこは附景氣に、「嫁が来るんだ。遠くからでも見えたら頼むよ。」合点ものです。そいつが、今です、前刻ですよ。そこから覗いて、「来たよ、花嫁。」……

一言で面くらつて、あなたのお顔も、姿も見ないで、跣足で庭へ逃出した始末です。断じて、決して、あなたと知つて逃げたのではありません。」

しまった！ 大家が家賃の催促でも済んだものを、馬鹿の智慧は後からで、お京のとりなしの純真さに、つい、事実をあからさまに、達引だの、いや矢ぶみだの、あさましく聞きはしないか、と、舌がたちまち縮んで咽喉のどへ声の詰る処へ。

「光邦様。」

日ぶみ矢ぶみの色男の汗を流した顔を見よ。いまうわさしたその窓から、お滝の蝶々鬚が、こん度は羽目板の壞れを踏んで上つたらしい。口まで出た。

「お客様の、ご馳走は。……つかいに行つて上げるわよ。」  
また、冷汗だ、銭がない。

### 三十九

「これは、これは、おうようこそや。……今の、上り端あがばなを覗いたら、見事な駒下駄かっこがあつたでの。」

ちと以前より、ごそごそと、台所で、土瓶、炭、火箸、七輪。もの音がしていたが、すぐその一枚の扉ひらきから、七十八の祖母が、茶盆に何か載せて出た。

これにお京のお諸礼式は、長屋に過ぎて、どうもく 瞳目にあたひ 価値した。

「あの、お祖母様……お祖母様。」

二声目に、やつと聞えて、

「はい、はい。」

「辻町さんに……」

「……」

「糸七さんに……」

肩身を狭く、ちよつと留めて、

「そんな事いったつて、分りませんよ。」

「……お孫さんに。……」

「はい。」

「いろいろとお世話になります。」

「……孫めはしあわせ 幸福、お綺麗なお客様で、ばばが目にも枯樹に花じや。ほんにこの孫この母親、わしには嫁ごじや。江戸から持ってござつての、大事にさしやつた錦絵にそのままじや。後の節句にも、お雛ひなさま様に進ぜさした、振出しの、有あるへい平、金米糖でさえ、その可愛

らしいお口よごしじやろうに、山家やまが在所しよの椎しいの実一つ、こんなもの。」

と、へぎ盆も有合さず、菜漬さいぢづかいの、小皿こしらをそこへ、二人分。糸七は俯向うつむいた。一雪きみよ、聞きけ。山果庭やまがにわ二落ふちテ、朝あさ三さんノ食し秋あき風かぜ二饜あクとは申せども、この椎しいの実とやがて栗りは、その椎しいの木も、栗りの木も、背戸せいこの奥深く真ま暗くらな大お藪やぶの多数くちなわの蛇へびと、南瓜かぼちゃ畑はたけの夥おびただ多たしい蝦蟇がまと、相戦あひまう衝しょうに当ある、地境ぢきやうの悪所あくじよにあつて、お滝たきの夜叉やしゃさえ辟易へきえきする。……小雀こがらほおじろ類るい白しろも手にとまる、仏ぶつづくつた、祖母そぼろでなくては拾ひろわれぬ。

「それからの、青紫蘇あおしそを粉こなにしたのじやがの、毒どくにはならぬで、まいれ。」

と湯氣ゆけの立つ茶椀ちawan。——南無三宝なんぶさんぼう、茶ちやが切きれた。

「ほんにの、これが春はるで、餅草もちぐさがあると、私わたしが手に、すぐに団子だんごなど拵しらえて進すすじようもの。孫まごが、ほつておきで、南瓜かぼちゃの葉はばかり何なににもないがの。」

と寂さびしい笑わらいの、口くちには齒はがない。

お京きやうがいとしげに打傾うき、

「お祖母様そぼろさま、いまに可愛かわいい嫁菜よめなが咲さきます。」

「嫁菜よめながの、嬉うれしやの、あなたのような、のう。」

糸七いとせちは仰天うやうやした、人参にんじんのごとく真ままで染そまて、

「お祖母さん、お祖母さん、お祖母さん、そんな事より、仏間へ行つて、この、きれいな、珍らしいお客様の見えた事を、父、母に話して下さい。」

「おいの、そうじゃの。」

何と思つたか、お京が急いで、さも、遠慮のないように椎の実を取つた。

「お祖母様。」

「……おお、食べてくださるかの。」

「おいしい……」

と、長いまつ毛をふるわせて、

「三度、三度、ここに居まして、ご飯のかわりに頂いたら、どんなにか嬉しいでしょう……」

と、息をふくんだ頬を削つて、ツと湧く涙に袖を当てると、いう事も、する事も、訳は知らず誘われて、糸七も身を絞つてほろほろと出る涙を、引振ひっふるうように炉に目を外そらした。

「喧嘩せまい、喧嘩せまい。何じゃ、この、孫めがまた……」

「——お祖母さん、芝居の話をしていたんです、それが悲しいもんですから。」

「それは、それは……嫁ごもの、芝居が何より好きでござったよ。たんと、ゆつくり話さつしやい。……ほんにの、お蒲団もない。道中にも、寢床にも被るのなれど、よう払うてなど進ぜましよう。」

祖母の立つたのを見ると齊しく、糸七はぴったり手をついた。

「祖母の失言をあやまります。」

「勿体ない。私は嬉しゅう存じました。」

と膝を退つて、礼を返して、

「辻町さん、では、失礼をいたします。」

何しに来たこの女、何を泣いたこの女、なぜ泣かせたこの女、椎と青紫蘇の葉に懲りて、破毛布に辟易したろう。

黙つて、糸七が挨拶すると、悄然と立つた、が屹と胸を緊めた。その姿に似ず、ゆるく、色めかしく、柔かな、背負あげの紗綾形絞りの淡紅色が、ものの打解けたよう可懐しい。框の障子を、膝について開けると、板に置いた、つつみものを手に引きつけて、居直る時、心急いた状に前褻が浅く揺れて、帯の模様もみじの緋葉が散った。

「お恥しいもんです。小さな盃は、内に久しくありました。それに、お酒をお一口。」

## 四十

「……………」

「私……しばらくお別れに来たんです。」

「……旅行——遠方へ。」

「いいえ。」

糸七は釈然として、胸で解けた。

「ああ、極りましたか、矢野とお約束。」

眉が一文字に、屹ぎつと視みて、

「あの方、お断りしてしまいました、他所よそへ嫁に参ります。」

「他所へ。……おきき申すのも変ですが。」

お京は引結んだ口元をやつと解いたように見えて、

「野土青麟とこの許へです。」

糸七は聞くより思わず戦わなないた。あの青大將が、横笛を、臭いきを浴びても頬が腐る、黒い舌

に——この帯を、背負揚しよいあげを、襟えりを、島田しまだを、緋ひの張襦袢ながじゆばんを、肌はだを。

「あなたが、あなたが、私を——矢野さんにお媒なごうど灼くなすつた事を聞きました口惜くやしさに——女は、何をするか私にも分りません——あなたが世の中で一番お嫌いだという青麟せいりんに、結納を済ませたんです。」

「……………」

「辻町さん、よく存じております、知っていたんです。お嫌いなさいますのも、お憎しみも分っています。いますけれど、思う方、慕う方が、その女を余所よそへ媒灼なごうどなさると聞いた時の、その女の心は、気が違うよりほかありません。」

と蒼い顔あおで、また熟じつと視て、はつと泣きつつ、背けた背を、そのまま、土間へ早や片棲かたせその棲おさを圧おさえても、帯をひしと掴つかんでも、搦からまる緋が炎えんでも、その中の雪の手首てのうでを衝つと取つても、世にげに一度は許されよう、引戻ひきかえそうと、我を忘れて衝と進んだ。

「危え、危え、ええ危えというに、やい、小阿魔こあま女めめ。」

「何を小癩こしやくな……チンツン」

と、目をぱつちり、ちよつと、一見得。

黒鴨くろがもの俣夫はやぶが、後うしろから、横よこから、飛廻とびまわつて、喚わめくを構かまわず、

「チンツン、さすがの勇者もたじたじ、チチレ、トツツル、ツンツ、ツンツ、こずえ木の葉のさらさらさら、チャン、チャン、チャンチャンラン、チャンラン、魔風とともに光邦が、襟がみつかんで……おほほ、ははは、ちやつちやつ、ちやつ。」

お京の姿を、框に覗くと、帰る、と見た、おしやまの、お先走りのお茶つぴいが、木戸傍で待った俵の楯棒を自分で上げて右左へ振りながら駆込んで来たのである。

「わかれに、……その気でいたかも知れない。」

小杯は朱塗のちよつと受口で、香炉形とも言いそうな、内側に銀の梅の蒔絵が薫る。……薫るのなんぞ何のその、酒の冷の気を浴びて、正宗を、壇の口の切味や、鉦も匂も金色に、梅を、臍に湛えつつ、ぐいと飲み、ぐいと煽つた——立続けた。

吻と吹く酒の香を、横状に反らしたのは、目前に歴々とするお京の向合つた面影に、心遣いをしたのである。

杯を持直して、

「別れだといいました。糸七も潔く受けました。あなたも、一つ。」

弱い酒を、一時に、頭上つた酔に、何をいうやら。しかもひとりと坐直つて、杯を、目ざすお京の姿に献そうとして置くのが、畳も縁も、炬縁も外れて、ずか、と灰の中へ突込

もうとして、衝と手を引いて、ぎよつとしたように四辺あたりにを視た。

「どうかしている。」

第一に南瓜島が暗かった。数千の葉が庭ぐるみ皆戦そよいだ。颶風はやて落来と目がくらみ、頭髪ずはつが乱れた。

その時、遣場やりばに失した杯は思わず頭の真中まんなかへ載せたそうである。

一よろけ、ひよろりとして、

「——一段と烏帽子が似合いて候——」

とすつくり立つた。

が、これは雪の朝、吉原を落武者の困惑を繰返したものではない。一人の友達の、かつて、深山越みやまごしの峠の茶屋で、凄じきすさま迅雷じんらい猛雨に逢つて、遁げにも、引きも、ほとんど詮せんす術べのなさに、飲みかけていた硝子コップ盃を電力遮断の悲哀なる焦慮で、天窓あたまに被かぶつたというのを、改めて思出すともなく、無意識か、はた、意識してか、知らず、しかくあらしめたものである。

青麟あきりんに嫁よめく一言ひとことや、直ちに霹靂へきれきであつた。あたかもこの時の糸七に、屋の内八方、耳も目も、さながら大雷大風であつた。

## 四十一

と、突立つたまま、苦い顔、渋い顔、切ない顔、甘い顔、酔って呆けた青い顔をしていた。が、頬へたらたらと垂れかかった酒の雫を、横舐めに、舌打して、

「鳴るは滝の水、と来るか、来たと……何だ、日は照るとも絶えずとうたりか、絶えずとうたりと、絶えずとうたり、とくとく立てや手束弓の。」

真似を動いて、くるくる舞ったが、打傾いて耳を聳て、

「や、囃子が聞える。ええ、横笛が。笛は止せ、笛は止せ、止せ、止さないか、畜生。」

と、いうとともに、胆略も武勇もない、判官ならぬ足弱の下強力の、ただその金剛杖の一棒をくらったごとく、ぐたりとなつて、畳にのめつた。

がながんがんと、胸は早鐘、幽にチチと耳が鳴る。

仏間にては、祖母が、さっきの言を真に受けて、りんなど打っていらははしないか。この秋の取ツつきに、雷雨おびただしかりし中に、ピシャン、と物凄く響いたのを、昼寝の目を柔かに孫を視て、「軒近に桶屋が来ているかの、竹の箠が弾いたようじゃ。」と、ま

たうとうと寝ねむつたほど、仏になつてござるから、お京が今し歸つた時の俵の音など、沙汰なしで、ご存じないが。

「祖母おばあさん……」

なき父、なき母。

「私は決してお京さんに。……ただただ、青大将の女房にはしたくないんです。」

と、きちんと両手をついたかと思えば、すぐに引ひきむしりそうな手を、そのまま宙に振つて、また飛上つて、河童かっぱに被かぶつた杯をたたいた。

「でんでん虫、虫。雨も風も吹かんのんに、でんでん虫、虫……」

と、狂言舞に、無性矢鱈やたらに刎歩はねある行く。

のそのそ、のそのそ、一面の南瓜の蔭から這出はいだしたものは蝦蟇がまである。とにかく、地借ちがりの輩やからだし、妻なしが、友だち附合の義理もあり、かたがた、埴生はにゆうの小屋の貧旦ひんだんなが、今の若さに気が違つたのじやあるまいか。狂い方も、蛞蝓なめくじだとペロリと呑みたくなつて危いが、蝸牛でんでんむしなら仔細しさいあるまい、見舞おうと、おのおの鹿爪しかづめらしく憂慮きつかわしげ気に、中には——時々ときの事——縁へ這上つたのもあつて、まじまじと見て面つらを並べている。

ここに不思議な事は、結びも、留めもしない、朱塗の梅の杯が氣きちがいまい狂舞に跳ねても飛ん

でも、<sup>すべ</sup>迂らず、転らず、頭から落ちようとしないので。……ふと心附いて、<sup>ひき</sup>臺のごとく<sup>しゃが</sup>跼んで、手もて取つて引く、女の黒髪が一筋、糸底を巻いて、耳から額へ<sup>ほっそ</sup>細りと、頬にさえ<sup>かか</sup>掛っている。

猛然として、藍染川、忍川、不忍の池の雪を思出すと、思わず震える指で、毛筋を引けば、手繰れば、<sup>しご</sup>扱けば、するすると伸び、伸びつつ、長く美しく、黒く艶やかに、<sup>ぶん</sup>芬と薫つて、手繰り集めた杯の裡が、<sup>うち</sup>光るばかりに漆を<sup>は</sup>刷く。と見ると、毛先がおのずから動いて、杯の縁を<sup>は</sup>刎ね、灰に染めじ、と思う糸七の袖に<sup>ゆる</sup>弛く<sup>かか</sup>掛りながら、すらすらと濡縁へ<sup>なび</sup>靡いたのである。

この瞬間、誰が、その藍染川、忍川、不忍の池を眺めた雪の糸桜を<sup>おもいおこ</sup>憶起さずいられよう。

見る見る、黒髪に散る雪が、輝く膚を<sup>はだ</sup>露呈して、再び、あの<sup>ときいろ</sup>淡紅色の<sup>さやがた</sup>紗綾形の、品よく和やかに、情ありげな背負揚が解け、襟が開け緋が乱れて、<sup>シャボン</sup>石鹼の香を聞いてさえ、身に<sup>し</sup>沁みた雪を<sup>あざむ</sup>欺く肩を、胸を、<sup>かいな</sup>腕を……青大将の黒い歯が、黒い唾が、黒い舌が。――

糸七は拳を<sup>こぶし</sup>固めて宙を打った――「この<sup>きちがい</sup>狂人」――「悪魔が<sup>つ</sup>憑いたか、狂わすか、しまつたり」……と叫びつつ、蝦蟇を驚かしつつ、敷きわがね、伸び靡いた、<sup>ひとすじ</sup>一条の黒髪

の上を、光琳の錦を敷いた木の葉ぢらしの帯の上のごとく、転々として転げ倒れた。

「光邦様、光邦様。」

ぎよつとすると、お滝夜叉。

「あい、お手紙。ほら、さつき来たんだけれどね、ね、花嫁が妬くと悪いから預つといたのよ、えらいでしょう。……女の人の手紙なんですから。」

——お伽堂、時より——で、都合で帰郷する事になり、それにつけ、いつぞや、『たそがれ』など、あなたを大のご贖肩の、中坂下のお娘、このお達引で、金子、珊瑚の釵の、ご心配はもうなくなりましたと申したのは、実は中洲、月村様のお厚情。京子様、その事堅くお口どめゆえ、秘してはおりましたが、このたび帰国の上は、かれこれ、打明けます折もつい伸々と心苦しく、お京様とは幾久しきおつきあい、何かにつけ、お胸にそのお含み、なによりと存じ………

——もう可い。

——(完)

作者自から評して云う、この(結び)には拵えた作意がある。誰方にもよく解る。……お滝が手紙を渡す条である。纏りがいいようにと思つたが、見えすいた筋立らしい、

こんな事はしないが<sup>いい</sup>。——実は、お伽堂の女房の手紙が糸七に届いたのは、過ぐること二月ばかり、お京さんと、野土青鱗（あおだいしようめ）画伯と、結婚式の済んだ後だったのだそうである。

昭和十四（一九三九）年三月

## 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成10」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年7月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十四卷」岩波書店

1940（昭和15）年6月30日発行

入力：門田裕志

校正：染川隆俊

2008年10月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 薄紅梅

## 泉鏡花

2020年 7月17日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>